

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お杉お玉

小国町昔話集 一

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お杉お玉

小国町昔話集 一

編 武 田 正

お杉お玉

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
兄弟話	三人兄弟	お杉お玉	糠福・米福	糠福・米福	魚女房	蛇簀	猿簀	狐女房	山鳥女房	絵姿女房	子育て幽霊	瓜姫子と天邪鬼	桃太郎

小国町昔話集(二)

51	49	45	40	36	34	30	25	22	20	17	15	10	5
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
花咲じじい	団子浄土	ネズミ浄土 (2)	ネズミ浄土 (1)	食わず女房	鬼婆むかし	三枚のお札	なら梨とり	金の斧・銀の斧	笠地藏	孝行息子	親孝行	カタコの孝行	孝行息子の藤六

89	84	83	81	77	74	69	66	64	62	61	59	56	53
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

スルス挽き唄

へあねさ 流しで酒こす音は

五月 さつきの雨のようだ

(囃) ウンテテ 引イタラ

アガリガ早カロ

(小国町大石沢)

1 桃 太 郎

むかしあつたけど。

じさとばさいたけど。そして子どもなくて何とかして、毎日子ども欲しいとは思っていたども、なかなか生れないで、一生懸命で稼いで、じんつあは山さ柴刈りに、ばさは川さ洗濯に行つたけど。

そして、ばさ、コチャコチャと洗っていたらば、赤い箱と黒い箱と流つて来たずも。

「赤い箱こつちやこい、黒い箱そつちや行げ」

て、一生懸命でそう言うて洗っていた。そしたば、段々に赤い箱寄つて来たら、拾つてきて、こんなきれいな箱、まず持つてきて、じんつあ上つて来たら見せんべと思つてもつてきて、流しの棚さ上げつだけ。そしてこんど、

「こんなめんごい箱のきれいな拾つて来た、じんつあ、今、流しの棚さ上げつだ」
て、二人で見れば、中さ桃入っていたずもな。

「こんなええ桃二人で食つてしまふも、もつたないから、まず上げておけて寝たずも。二人で。そして夜中になつたば何だか赤子の泣き声すつずもな。

ホガエホガエて。それからこんど蓋とつてみたど。二人で起きて、そしたば、きれいな男子、桃二つに割れて生れつだずも。

「ほう、これはええがったもんだ。おらださ授いたんだべ。桃から出たから、桃太郎と名付けんべ」

て、そう言うて、二人で相談して、桃太郎と名付けたずも。そうしてこんどはあ賢こい子で、ずんずんおがつて、うまいもの食せらつではあ、おがつて、若衆、十五、六才にもなつたかな。

「じんつあとばんちや、おれの願いごと聞いて呉んねえか」
て、そう言うずも。

「何でもお前の言うことだら、聞つから、何だ」
て、言うたば、

「他でないども、おれにキミダンゴ作つて呉んねえか、おれ、鬼ガ島さ行つてみ

たいから、鬼ガ島さ鬼退治に行つて来つから……」

「お前のような年の若いのに、退治なのでないんだから、まっともようまで我慢しろ」て言うども、

「どうでも作つてもらいたい」

て言うもんだから、キミダンゴ作つて呉^くつたずも。そしてそれ腰さ袋^いさ入^いつで下げて、ずつと行つたど。そして行つたば、犬きたんだな。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どさ行ぐ」て言う。

「おれ、鬼ガ島さ鬼退治に行くべと思つて出かけて来た」

て言うたば、

「その腰に下げた袋は何だ」

そしたば、

「日本一のキミダンゴじゆうもんで、一つ食えばうまいもの、二つ食えば苦^{にが}いもの、三つ食えば辛いものだから、あまりいっぱい食ねで、一つ食つて止めねえもんだ」

て言うたど。

「一つでええから呉つでくろ」

て言うた。そして一つ呉つで食せたど。そしたばうまいもんだて喜んで食つて、

「おればも家来にして伴させてくろ」て。

「あんまりええから歩^あえべ」

そしてずつと行つたば、こんど、猿来たずもな。猿は、

「どこさ行く」

て、また、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさ行く」

「鬼ガ島さ、鬼退治に行く」

て、出かけて来たば、猿も一緒に伴して来て呉つたど。そして、

「腰さ下げつたものは何だ」

て、聞かつた。

「日本一のキミダンゴで、うまいもんだども、一つ食えばうまいもの、二つ食え

「ば苦いもの、三つ食べば辛いものだから、一つより余計は食んねもんだ」て。

「一つでええから呉ろ、おれも一緒にいんから」

て、また一つもらつて食つてずつと行くど、こんどキジ飛んで来たどな。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさ行く」

て、また聞かつて、その通りに言うたど。そしてそれも一つもらつて食つてはあ、三人が、犬と猿とキジと伴して、鬼ガ島さ行つたど。そして来てみたば、鬼ガ島さ行つてみたば、何と大した構えの門で、なかなか開けられそうもないような厳重な門だけど。どういう風にして開けたらええて工夫したば、キジは飛んで行つて上から入つて錠あける。それから犬も猿も桃太郎も入り込んで、そしてみんな鬼共ば降参させて、こんど、

「何でも言うこと聞くから、有りつたけの宝あげし、言うこと聞くから、生命だけ助けてくろ」

て、鬼ども言うたずも。そしてこんどは金だの銀だの、サンゴなあ、ええものいっぱい入つてた宝物の箱出してみんなもらつて、車さ一つに積んで、キジは綱

引くエンヤラヤ、猿は後押すエンヤラヤとして、そしてめでたく、じさとばさどさ帰ってきて、そしてじさにもばさにも喜ばれ、お上からも御褒美もらって、みんなに喜ばつて、桃太郎という有名な名前、今でも残っている。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

2 瓜姫子と天邪鬼

むかしあつたけど。じんつあとばんちやど、いてやったど。ばんちや川さ洗濯に行つたば、川上から大きな瓜、ドンブリコ、ドンブリコと流れて来たど。それから、

「こんなうまそうな、拾ってじんつあと食うべ」

て思つて、そして家さ持つて来て、割る気になつたば、瓜の中から、かわいい

女の子生れてきたど。そして、

「瓜から生れたから、瓜姫子と名付けっぜえ、じんつあ」

て、そして瓜姫子と名付けて、めんごく育てて来たど。そして大きくなつてから、機織りするようになったずも。そしてトントンカラリン、トンカラリンと機織れるようになって、じんつあとばんちゃ、

「おらだ、町さ行つて、お前の好きなもの買つて来てくれつから、おらだ留守のうちに、天邪鬼来たたて、決して戸開けんなよ」

て、そう言うて教えて行つたど。そうして瓜姫子はトントンカラリン、トンカラリンと織つてだど。そしたば天邪鬼来たずも。そして、

「瓜姫子、瓜姫子、ええ空だから遊びに行かねか」

て、こう言うたど。

「いいや、今日は機織れつて言わつだから、出はんね」

て、こう言うたど。

「そんなこと言わねで、出てみる、この戸、ちいと開けて呉んねえか」

て、こう言うど。

「じんつあとばんちやが開けんて言わつだから、開けらんね」

「指の先だけでもええから、出して呉んねえか」

て、こう言うずもの。ぼんでやさしい瓜姫子なもんだから、少し開けて呉つたど。そうすつど、ガラツと開けて入つてきてしまったど。そしてこんど、

「遊びにあえべ、あえべ」

て、聞かねずも、瓜姫子ば引張つてはあ。そうして裏の桃の木の下のキンニヨ（木を積んでおくところ）さ連れて行つたど、遊びに。そうしてその木の上さがあがつて遊んでいるうちに、

「瓜姫子、おれ、シラミとつてくれっから」

「頭さ、シラミなどいねぜ」

て、言うげんども、聞かねで髪ほどいてしまったずも。そうしてその桃の木の枝さ、髪、ギイギイと巻いてしまつてはあ、瓜姫子のどこ下げてしまつたずも。そしてはあ、殺してしまつたずも。そうして瓜姫子の着物みな剥はがして自分が着て

こんどは機織してたど。ほだども、あんばいよく織れねがったべども、織ってたど。じんつあとばんちや帰って来たど。

「瓜姫子、天邪鬼来ねがったか」

て聞いたど。

「来ねがった」

「ほんだら、トコロも掘って来たから、トコロゆで呉れ^くから、これから食うか」

そう言うたど。そしてゆで呉^くたら、皮も剥かねで食うずもの。

「瓜姫子、皮剥いたり、毛むしたりして食うもんだぜ」

「毛は毛の葉、皮は皮の葉だ」

て、みな食つてしまふ。そうしておかしいなとは思つてだども、こんど次の日になつたば、向うの町から、

「瓜姫子はええ娘だちゆうから、嫁に呉^くつでけろ」

て来たど。じんつあとばんちやは呉^くつでやつたど。そしてずっと行くど萱野さ

行つたど。そうすつど小さい鳥とんできて、簞さ喰^く付いたど。

瓜姫子ののる簞に

天邪鬼は のりーた のりーた

てさえずる。天邪鬼は「シイシイ」と追うども、「瓜姫子ののる簞に、天邪鬼はのりーた、のりーた」

て言うど。そうすつど、供の者も気付いてはあ、

「この畜生、化けだか」

て叩いて教えたど。そしてそこ萱林であつたもんだから、そこ、天邪鬼の血でそれ染まつて、今でも萱の根は赤いど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

3 子育て幽霊

むかしあつたけど。

あるところに若くて子ども生んだばかりで死んだドッス、お嫁さんがな。そ
んだども、こんどその旦那さんが子ども抱かえて、貰い乳して歩くようなあんばい
であつたど。

死んでもその母親は子どものこと心配で、心配で、そして夜になつど、お墓か
ら出てきて、――この辺で死んだとき、六文お金もらつて行くのな、――その一文銭
もらつて飴屋さ行くずだもの、毎晩げ。そして、

「飴、一文宛売ってくろ」

て、そう言うて、一文宛の飴買ってきて、そして子どもの口さ、その飴放り込
んで帰り帰りましたど。そしてはあ、六晩も続けたども、あと金がなくて買うよう
でしながつたど。それ、こんど父親は、

「はあて、六晩も大人しかつたに、まづ……」

て思つて、

「なんちゅうごんだべ、こんなことは…」

て、そう思つていたど。そしたば、その飴屋に、

「こういう女が、おらえさ飴買いに来てあつた」

て聞かせらつて、ほんで、

「死んでもこの子ば心配して、出てきたなであつた」

て、よくよく大事に育てらんねて、親父あ本氣になつて子ども育ててあつたど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

4 絵姿女房

むかしあつたけど。

男が殿さまさ仕えていて、よく勤めたもんだし、お妃さま十人のうち、どれでもええのさ嫁にさせるというもんだから、仕度させて、座敷通したど。そうすつど、「そんな野郎、嫌んだ、やんだ」て言うもんで、身成りねじって行くども、一人やつと嫁になると言うた。そして貰ったそうだ。そして年夜になったもんだし、殿さまが休むと、その男は年男させらつたど。そうすつど、嫁は男さ、

「年男さあ、早く起きんなねもんだど」

て教えたど。殿様起きてきた。

「あんにや、あんにや、今何刻だ」^{とき}「はい、夜は夜の真中でござる」
て言うど、「これはよく出来た」。そしてまた少しして起きてきて、

「あんにや、あんにや、今何刻だ」^{とき}

「はい、夜は夜の真中でござる」

そしてまた三度目に殿さま起きたそうだ。

「あんにや、あんにや、今何刻だ」

「はい、夜はせいせいとしたところでござる」

「これはよく出来た」

て、殿さまがお褒めになつて、そこを二人で出ることになった。二人で暮すことになった。その女、あんまり器量ええ女で、あんにやは見ていらんねがったど。

「おれあ、そんがえ仕事しねていらんねがら、ほがえにおれば見たいごんだら」
て、絵を描いてもらつて、絵をあずけてやつたど。そうすつど、火野かのうないの先に絵を立てておいだどこだど。一生懸命に眺め眺め、うなつてだば、大風吹いて来て、その絵あ吹つとんで行つたど。男は柔やつこくなつて、

「いやいや、困つたことになった」

「何困つたこと、あやまちでもしたか」

「いやいや、嫁あねの絵、風の神、持つて行つた」

「そんなことなど、さしつかえあんめえちや」

その絵は殿さまのどこさ吹つとんで行つた。

「ほんげなええ女いたらば、どこまでも探せ」

て、探させたど。そして殿さまから取上げらつたど。取返しに行つたら、

「灰縄、千尋もつてこい。ほんでなくば許さんね」

て言わつた。そんでまた男は、柔やっこくなつたど。

「嫁あね、嫁、まず困あつたことになつた」「なんだ」「灰縄、千尋もつて来い。灰縄な
て、どうしたらええんだか」

「いやいや、そんなことは何より造作ない。おれ、一晩げにもななわわれるから、ん
だらば萱刈あつてこい」

て、ジャリジャリとなつて、火付けて、そいつさ塩水かけたもんだ。そしたら
ば、千尋の縄、そくつと出たずもな。そうして、

「ほら、あんにや、これ持つて行つて」

て、あずけてやつたずなだ。こんど一生安楽に暮したずなだ。

むかしとーびん。さんすけ笹巻まいだけど、ごんすけ来て食ったけど。

(加藤たつ)

5 山^き鳥^じ女房

むかしあつたけど。

ある百姓、山道、夕方通りかかったば、一羽の山鳥^{きじ}、罌^{わな}にかかつて苦しんでいたとこさ通りかかつて、それ助けて家さ帰ったけど。そしたば、次の日、ええ女尋ねてきて、

「おれ行くどこ持たねから、かか^かにして居て呉んねが」
言うて、その家にいるようになったけど。そして、

「おれ、何も仕事もないから、機でも織るから、おれ、ほだども、機織^{はたオリ}ってるうち、機織部屋さ来ないでくんねえか」

そう頼んで、そして織って出来あがった機持つて来て、そしてこんど、この親父に売らせて、儲けらせてあつたど。そして、

「また織るから…」

と言うども、

「こんな、きれいなな、どんな真似して織るもんだか」

て思つて、そつと窓の切れから、親父が見たつて。そしたば羽根もろくになく
なつた山鳥きじ、一生懸命で機織りしてであつたど。そしたば、山鳥が見らつたこと
分つて、んだから、その機、一反織り上げつどはあ、

「おれが、この前助けらつた山鳥であつた。恩返しに來たんで、あつたども、見
らつてはいらんねから、これで帰らせてもらう」

て帰つて行つたけど。

んだから、鳥でも恩返しということ知つてゐるもんだど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

6 狐 女 房

むかしあつたけど。

安名という人に、石川悪右エ門という人など大勢で山狩りに出かけたど。そうしてこんど、みんな、ワアワアと狩ってるうちに、一匹の狐、手負いになってはあ、生命からがら逃げて来たずも。そうすつど、安名はむ・ご・さ・く・な・つて、とても自分の狩のことなどよりはあ、その狐助けだくなつて、隠してしまつたずもの。それからこんど、

「どこさやつた、どこさやつた」

て、悪右エ門は一生懸命でただすども、

「おら、そんなもの知しやね」

て、そして自分の陰さ隠して、そのうちに逃がしてやつたずも。それからずつと狩終して夕方になつて帰つて来てみたば、奥方は、葛の葉姫というのであつたど。それは上の方さ小間使いに行つて留守なとき、安名帰つて行つてみて、「オイ

オイ」て呼んでみたば、出て来たずも。葛の葉姫がな。

「いま帰った」

なて、それからこんど仲よく暮しているうちに毎日、葛の葉姫は勤めに上つていたべし、安名はその下役で一生懸命その方の仕事して暮したうちに、こんど子ども生れだずも、男子。おとしこそしてそれを童寿丸と名付けたけど。そしてめんごがって、めんごがってはいあ、大きくなつて来た。日増しおがるな分つて。よくおがつて、利口な子になつて、二つ、三つにもなつてから、安名、勤めに出っだうちに、その童寿丸ば乳くわえらせて昼眠したずもの。そしてこんど昼眠しているうちに、やつぱりけだもの獣は昼眠してつど、本性抜けしてしまうらしく、よく眠つていたとこさ、安名帰つて来て、その狐の姿なつてたどこ見つけてしまったずも。それから、「オイオイ」て言葉かけたども、見つけらつだもんだから、「ハイ」て出てきたものの、万一、この姿見つけらつでは、ここには、おれはいらんねと思つて、その親父の勤めに出はつた後にはあ、また子ども寝かせて書置したど。

恋しくば尋ねきてみろ泉なる

信太の森の うらみ葛の葉

て、そう書いて、そして信太の森さ行つたずも。そしてこんど、童寿丸は泣いたずす、それから安名は、あんまり泣くもんだから、背負^ぶつて行つてみたど。信太の森さ尋ねて。そしたば年寄つた狐、ブンブンと降りて来るから、

「オイオイ、そんな姿で来ては、童寿丸、恐つかながつかから、元の母の姿で来い」
て、そういうど、また克蘭克蘭と、とつくら返つて、葛の葉姫になつて帰つて来て、

「よくよく、童寿丸、おれの言うこと聞けよ、おれはこういうときの巻狩りに、おとつつあんに助けらつて、恩返しに母親の姿になつて生んだなだども、人間界に長くいられる身でないから、よつくおれのいうこと、年行かなくとも聞き分けて、近所の子どもば、いじめたり、近所の坪山を荒したりしないで、立派に育つてくろ」

て教えたば、小さいながらもうなずいて、そうしてこんど安名に背負^ぶさつて、もどつて来てはあ、立派な若衆に成長したど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

7 猿

聲

むかしあつたどき。

じさまが火野^{かの}うないに行つた。そしてあんまりこわい。(疲れる) もんだから、
一人口たつたど。

「こわい、こわい。こんなこわい思いして、火野うなわんなね、娘三人持ったが、
この火野うなつて呉る人あれば、どれでもええ娘呉れつどもなあ」

て一人で喋べつたずうなだ。そうすつど猿で、

「じさ、じさ、何語つた、今」

「何にも語らね」

「何にも語らねなてない。おれあ藝にいて聞いてた。何か語ったぞ」

「いや、おれは本当は、あまりこわいから、この火野うなつて呉る人あれば、娘三人持てたから、どれでもええな呉れるて、本当は言うたてな。」

「そんでは、おれ、うなつて呉つから、おれに呉ろ」

て言われて、

「あんまりええごで」

て、返事して、うなつてもらったども、家さ帰つて、

「こんなこと言うたつて、オイという子どもないし」

あんまり心配して、頭痛めるといふて寝たずだ。そうすつど一番大きい娘が、

「父ちゃん、起きて御飯食え」

て言うたども、

「いやいや、何も食いたくない。ほだども、おれの言うこと聞いて呉れば、起きて食うども…」

「なんのことだか、ほだら語ってみろ」

「そして、こうこうだと語ったら、猿あ出てきて、そして一刻ときにうなつてもらつたら、お前、嫁に行つて呉んねえか」

て言うたれば、

「何もんぼれこいでけつかる。猿のおかたに嫁いかれつか」

て、枕蹴つとばして逃げて行つたどか。

そして二番目の娘もその手で来て、じさま頼んだども、それも行つて呉くんねえ。一番末の子きて、

「何でも聞くから、じんつあ。具合のわるいのさえ治つて呉くれるごんだら、あんまりええ、猿のおかたになつて行くから、御飯食つて治つて呉けろ」

て言わつて、じさま起きて御飯食つて、何日にやることに、火野のどこさ行つて決めて、まず、猿の屋形さ嫁に行つた。

三月のお節句に、餅搗いて、

「何さとつて持つて行つたらええがな。笹さ取つて持つて行くか」

て猿あ言うたら、

「いやいや、おらえの年寄は笹さ取れば、笹くさいから食わねと言うし」

「重箱さ入れつか」

「いやいや、重箱さ入れれば、重箱くさいて食ね」

「ほんだら、何さ入れて持つて行くごと」

「本当は、臼さ入れてそのまま背負つて行けば、大喜びして食うから、そうして持つて行つてもらふ」

て、臼さ入れたままで背負つて来たず。途中さ来つど、川の上さ桜なびいて、なんぼかきれいに咲いていた。

「じさまは桜好きなんだから、桜取つて行けば喜ぶから、取つてもらつて行くべ」
て。猿は臼おろす気になつたずなよ。

「いやいや、土さ降ろすと、土くさいつて、決して食ねがら、そのまま背負つて登つてくろ」

て。そして背負つたままで登つた。

「これいいか」

「んだな、それよか（それよりか）、もう少し向うの枝だとええな」

「んでは、これか」

「いやいや、いまだ少し枝のええところ取ってもらいたいな」

で、そういうことを語って、段々と上さやると、重いもんだから、桜の木折れて、川の深いどさ落ちて、臼背負ったまま流れて行きながら、

川に流るる生命はおしくなければ

後に残りし姫恋しや

（さる沢に流るる生命はなけれども

妻のお菊が悲しかるらん）

（さる沢に流るる生命はおしまねど

娘泣くはあわれなりけり）

で、歌ったど。そして娘が家さ帰ってきて、そこの家の後継りして、一生安楽に暮したけど。んだから親の言うこと聞くもんだ。

むかしとーびん。

（高橋きみの・川崎みさを・高橋しのぶ・加藤たつ）

8 蛇

聾

むかしあつたけど。

じんつあとばんちゃといって、三人娘もついでやつたど。そしてこの人は裏田に千刈、前田に千刈、田んぼ持ってたど。そしてその年はなんと旱魃で裏田千刈に水掛ければ、前田千刈干^ひつてしまう。前田千刈に掛ければ裏田千刈干^ひつてしまう。そしてその水の出るとこの沼さ行ってみたら、沼の水も少なくなってたど。

「はてはて、裏田千刈、前田千刈さ水かけてくれる人あれば、娘三人持ってたが、どれか一人呉れるが…」

て、一人言語ったど。そしたら、きれいな男が、その沼がボーツと波立つと出

て来た。そして、

「じんつあ、じんつあ、今の話本当だか、おれ掛けてくれっから、おれに呉れるか」

て、こう言うたど。そしてこんど、家さ来だども、そんな一度に掛けられるもんでないと、簡単に約束して来たど。そしたらその晩、大雨降って、前田も千刈、裏田も千刈、みんなダンブリ水かかってしまったど。

次の朝げ、じんつあ困って寝てて起きねど。姉娘行つて、

「あの、じんつあ、じんつあ、飯出たから起きろ」

て言うたば、

「いや、実は飯も食くたくないようだ。昨日、おれあ沼のときさ行つてこういうこと言つたば、これこれの男出てきて、約束したな、それがその約束通り雨降つて、裏田も前田も、ダンブリしてしまつたど。そんで嫁に、お前だ、どれか一人呉んなね、行つて呉れっか」

てこう言つたど。

「そんな、わけの分んね者さ、嫁いかれるもんでない。なんぼ、じんつあでも……」
て、こんど荒々しく出て行つたど。二番目の娘きて、

「じんつあ、じんつあ、飯だから、起きろ」

そしてまた、その通りに言つたども、その娘も、

「そんな馬鹿なとこさ行かんね」

そう言うて出て行つたど。三人目の娘来て、また言うたど。そしてその通りに
じんつあ言うたば、

「ええどこでない。じんつあ、ほだらおれの頼みも聞いて呉ろ。おれにヒョウタ
ン千と針千本買つて呉れば、嫁に行くから、買つて呉ろ」

て、そう言うたど。そして、じんつあ、

「そんなことはあ、あんまりええぜ」

て、早速小国の町さ行つて買つて来たど。そして何すつと思つたら、そのヒョ
ウタンさ一本一本に娘はみな針入つづらつてしまつたど。そうして、

「これを、おれの嫁入りの葛簞つづらに入れて下さい」

て、そして入れてもらって待ちていたど。約束の日、そうしたば、ええ男あ来たど。迎えにな。そして、

「おれと一緒に歩えべよ」

て、そう言わっで行ったど。そしてついて行ったら沼であつたど。

「ここがおれの家だから入れ」

て言わつたど。

「入るは、あまりええども、これ身上だから、葛簾、これも一緒に入って行くから、身上沈めてもらうまで入らんね」

て、そしてその葛簾入れたら、蓋とれてそのヒョウタンみな浮きたど。そうすつど、その男、一生懸命で、そっち沈めあっち沈めすつども、ヒョコン出はり、ヒョコンと出はりすつずもの。そうして夢中になつてゐるうちに、自分の化けたことも忘れてしまつて、大きな大蛇になつてしまつたど。そうしてバダンバダンと沈めようとしているうちに針出はつて、全身さ刺さつてしまつたど。そうしてはあ、苦しんで苦しんで死んでしまつたど。娘は、

「ああ、これでよかった。そうしたら田も干ほされることはないし…」

て思つて、家さ歸つて来て、じさまにその話したど。

「お前は姉妹じゅうで一番親孝行だから、この身上は、みなお前に呉れつぞ」
て、そして後とり娘にしてあつたけど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

9 魚 女 房

むかしあつたけど。

男、一人暮ししたどこさ女が来て、「休ませてくろ」て言わつて、休んでいるうちに、「泊めて呉ろ」と言わつて、こんど「貰つて呉ろ」て言わつた。そして貰つたど。

毎日毎日、ハラ子汁して食わせるといふのだな。男は、ハラ子なても買つておかねし、魚屋も遠い^{とが}に、なじよして求めて来て食せるもんだべど、

「用達しに行くべ、弁当拵えて呉^くろ」

て弁当拵わせて、そつと梁の上さあがつて見たど。晩方になつて、御飯炊き^{おま}の時に、味噌すつてお汁鍋さ入れて、そこさ股がつているずも。

「変なことするもんだ、汚ないことするもんだ」

て見て、山に行つた振りして来て、御飯出したの、お汁食たくない^とと食わなかつたど。それで、

「拵うどこ見らつでは、これまでだから……」

て、大きな鮭になつて、流しさ入つて行つたど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

10 糠福・米福

むかしあつたけど。

あるところに糠福・米福という二人の姉妹いだども、姉の方は先のおつかの子で、糠福の後のおつかの子は米福。あとのおつかは自分の子めんごいもんだから、何するにもええものあずけて、ええもの食べらせて、ある日、

「山さ、二人で栗拾いに行つて来い」

て、袋渡されて山さ行つたら、米福の袋はええ袋で、糠福の袋は穴あいたもんだから、なんぼ拾つてもたまんね。そして弁当持つて行つたのも食べねうちに、米福はいっぱいになったども、糠福のは、なかなかたまんねで、半分ぐらいなもんだずも。そして、

「姉、いっぱいになったから、家さ行かねか」

て言うたば、

「おれはまだ一杯になんねから、こればり拾つて家さ帰らんねから、お前先に帰

れ。おれ、いっぱいになり次第に帰るから」

て言うて先に帰したけど。そしてこんど、よつぼど拾ったども、いっぱいにはなんねし、

「これどうしたらええんだか、まず。お昼でも終おやしてから、また探して拾うように」

て思つて、沼あつけから、そこさ腰掛けてそしてこんど食べだども、そいつ糠福の混ったおいしくない御飯で、とても食べらんねから、沼の中さ投げてやつてそして何か思案したら、沼の水がにわかおに動いて来て、そつから角の生えた蛇体が出はつて来て、恐つかないで逃げそうにしたら、

「これこれ、逃げんなよ糠福、糠福。決して恐おつかなくない。おれはむかしお前のおつかであつたなだぞ、よつく見ろ」

て、そう言うたけど。そうしてこんど氣落付けて見つたら、そのうちにポロリポロリと角落ちて、ええおつかさになつて、そして、

「そんな難儀してんで、おれ、もう一ぺんこの沼さもぐつて行つて、そして袋

拾つて来て、お前に渡すから、これ持つて行つて家さ歸つて行つて、それほ・ご・す・ど、中に――その袋は延命小袋――打出の小槌が入つていつから、家さ持つて行つて、誰さも見つけらんねようにしまつておけよ」

て、それ渡して、こんど、

「栗だたつて、いっぱいになんねつたつて、家さ行つて、何々出ろてこの打出の小槌でこの袋叩けば、何でも出つから、こがえに暗くなるまで居ねでええから歸れ」

て教えらつて、そして歸つたけど。それから誰にも見つけらんねようにして、そしてその袋と中の打出の小槌出して「栗出ろ」て叩いだらば、栗たくさん出て、米福拾つて来たぐらいのがさ（量）になつたもんだから、やめて、また大事にしてそれしまつておいだけど。そしてこんど、脇から見れば、糠福は米福よりも器量もええし、氣立てもやさしいもんだから、あつちでもこつちでも嫁に呉ろ、嫁に呉ろて、もらいに来たど。

「糠福のことであんめえや、米福だべや、糠福など何にも知しやねし、米福だば

糠福よりかえってええ。米福の方もらってもらいたい」

て言うども、もらいに来る人は糠福ばかりであつたど。そしてこんど、いよいよ糠福、何にも着物など持たないで、体ばりでええから、そういう人あつたもんだから、そさ呉つでやつたど。いよいよ御祝儀のときになつたば、家からはボロボロな衣裳の一つも買ってもらつたぐらいで出て行つたども、こんど行つて自分の部屋さ行つて、その沼から出たおっかに貰つた袋、かくしつたな、そして打出の小槌出して「衣裳出ろ」て叩いたば、紋付の衣裳も出、「帯出ろ」て叩けば、帯も出、立派な花嫁になつて、そしてこんど、一生そこで幸福に暮して、米福はそのようには行かなくて、おっかと二人で、むかし通りの暮しで住んだけから、あんまり後妻だたつて、先の子ども粗末にしないで、平らに育てるもんだけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

11 糠福・米福

むかしあつたけど。

糠福は先妻の子、米福は後妻の子で、後妻が二人そろえて、糠福は糠の混ったお昼飯、米福には米ばかりの団子あすけて、

「栗拾いに行つて来い」

て、出したどな。糠福にはボロボロに穴のあいた袋あずけてやる。米福にはええ袋あずけてやる。

「その袋一つにならない内は、どっちも家さ帰つて来るな」

て言うたどな。二人が山さ行ったところが、米福のは、ええ袋だから、

「姉、あの、おら方、いっぱいになつたから行くべ」

て言うども、糠福は、

「おら、いっぱい拾つてこいて言わつたな。いっぱい拾つて行かねば、おつかにおんつあれる（叱られる）から、お前早く行け、おれあ後で行くから」

て言うて、沼の端で、

「腹へったから、ここで昼飯食うべ」

て、団子食つて、米福は半欠けを沼さ投げたら沈んだども、糠福のは投げたども沈まね。

「あの、姉、なして姉の投げたの沈まねべ、おれなの沈んで、姉なの沈まねのはどうしたことだ」

て言うど、

「お前のは、米いっそうだし、おれのは糠さ少し米の粉ちいと混まじつたんだから沈まね」

沼の端で、糠福は涙こぼして見つめていたれば蛇体が、角ふり立てて出てきたどな。それを見て糠福は恐つかない、て逃げにかかったれば、

「いやいや、糠福、逃げることないぞ、おれはこんな姿には、今なつていだも、お前の先の母だ」

とな。

「年中、今のおっかにいじめられでる。情なくていたなだ」

て、角あボロボロともげて、元の母の姿になって、

「あんまり、お前どこむごさいから着物に髪かざりに手箱さ入れて、今おれ、この沼の中さ入って行つてこの手箱浮かしてよこすから、それ持つて帰つて、今のおっかに見つけらんねように隠しておいて、その内にお前のどこさ、もらい手あ来るから、その時出して、これを着て行け」

とな。そうして糠福は手箱もらつて帰つた。そして家さ来て、見つけらんねように仕舞つておいだど。

猿樂あつたときに、米福は先に仕度して行つたずす、糠福にはおっかが、

「お前も見に行くはええども、こさ粟干すから、この粟をみんな落して食うようにしたらば、猿樂さ行げ。それはお前の仕事だから、そいつ終おやさね内は行くな」
そしたら、なんぼか雀は降りて、粟干してあつどさ入つて突つくんだど。うんと騒いだど。そうすつど、友だちは、

「糠福、猿樂さ行くべ」

て来つども、

「おれはこの栗落さねうちは、行かんねから、お前だ先に行つてで、後から行くから」

て。そして、

「みな、雀食うぜ、栗落さねうち行かんねなんて、早くほろたらええがんべ」

「雀だつても食いたいべも。ええからちいとぐらい食せろ」

て、かまねで置いたところが、雀あみんな嘴で突つついて落して、食うようにして呉れたど。やっぱりそれだけ糠福の難儀してるとこ、雀に恩典受けたということだ。そしてそれ終つて、お湯さ入つて、もらつた着物きて、きれいな袴おとして、猿樂さ行つた。そうすつど、米福は見て、家さ歸つてから、

「おつか、おつか、おらえの姉など、まず、あんなええ着物きて、きれいなカンザシさして、魂消た。おらもあんな着物から、カンザシ欲しい」

とて、氣イもんで歸つて来たずなよ。

「そんなもの、姉のであんめえちやえ、そんなええ着物、きれいなカンザシするようないんだ、どこかの金持の姉さだこで」

なて、おつか言うたど。

「いやいや、ほんでない」

て、米福もが・つ・て・し・ない。糠福は猿樂に行つて見込まれて、もらわれることになつて、車をひいてもらいに来て、嫁むかつて行つた。そしたら米福も、

「姉など、ええごんだ。あんな車さのつて、あんなええ着物きて、おらもああい
う車さのりたいたい」

なて言うど。そんでごねで（たたこねて）ゴザのガムシさのせて、おつかが引
ずつて大きな生簀のふち巡つたど。そしたら生簀さ米福を落して殺したど。

んだから、継子だけ決していじめることでない。
むかしとーびん。

（高橋きみの）

12 お杉 お玉

むかしあつたけど。

あるところに、お杉というめんごい女の子生んで、おつか死んだずもの。そしてはあ、おどつつあ一人になって育てて、お金ないもんだから、あんまり大変で後添いもらつたど。そうしたば、また女の子出て、姉はお杉と名付け、こんど後添いの子をお玉と名付けたど。そしてこんど毎日毎日、始めのうちは可愛いがつていたども、自分の子どもおがるにつれては、お杉はめんごくなくて、お玉ばかりめんごくなつたずも。そして、さまざま真似して食いものさ毒入つて食せるのなんのというの、みんな妹が聞いてて、

「姉、姉、おつか団子搾えたときな、こういう色んな決して食うなよ。これさ毒入れんのだから、死ぬから。食うときはこういうの食えよ」

て教えつこんだずも。そしてそういう風にして、仲ええ姉妹であつたども、どういうことだか、母親は姉ば憎くて憎くてはあ、何とかして殺してしまいたくなつ

てしまつたど。そして父親の稼ぎに出はつた後に、

「おれ、生き埋めにして殺して来つから、おどつつあにも、他人にも教えんなよ」
て、そして、こつそり誰か近しい人に箱拵こぎつてもらつて、入れて、

「殺さねで入れつから、決して喋つてはなんね」

て、固く口止めさつたずも。お玉はやさしい妹であつたもんだから、

「姉、姉、おつかあは姉どこ、生き埋めにするというども、そんなこと、おれ、
させたくないども聞かないから、ずっと姉ば辿つて行つて助けたいな。どうい
う風にしたらええかと思つて考えたば、白い砂、おれ袋さ入いつで、箱さ入いつでやつ
から、それずつと底も落ちこぼれるようにすつから、ずっとその砂振り振り行け
よ、埋めらつたとき」

て、そういう風に言うたど。そしてこんど、お玉に言わつた通り、ポロポロ、
ポロポロ白い砂撒きまき行つて、とうとう埋めらつたずも。

お玉が母親の留守なうちに、白い砂辿つて行つて、そしてそこ掘つたば、箱出
はつて、さいわいに生きていだつて。そしてこんど、お玉とお杉は逃げたど。

「家さ戻れば、おっかにいじめられっから、二人で逃げて行きたい」

て行つたど。そして遠かいところに行つて、どこかで奉公しつたど。

そして、親父、帰つて来て、

「かが、かが、なしてお杉帰つて来ね。あまり帰つて来ねな、暗くなつても、来ねなでもないな。どこさ行つた」

て言うたば、

「今日は遠いどこさ、親類さ小間使いに行つたもんだから、泊つたかもしんねえ」
なて、ええくらいなこと言うてはあ、はつきりしたこと教えねずも。そしてこ
んど、そんなこと言うてるうちに、おとつあは泣いて泣いてはあ、目泣きはら
して盲目になつてしまつたど。

そしてこんど、鉦あつたから、それ叩いて尋ねて行つたど。そして山越え川越
え、順礼のようにして行つたずも。

お杉とお玉がいたならば

どうしてこの鉦たたかばや

チンカラ チンカラ

て、鉦叩き叩き行つたど。そしたば小さい町であつたべども、はたごや旅人宿屋のよう
なところで、二人で奉公していたんだっけど。そして、

「何だか異な音立てるの来た」

て思つて、出はつてみたば、鉦叩いてそして座頭になつた男いたずもの。そして
聞いたば、

「お杉とお玉がいたならば、どうしてこの鉦叩こばや、チンカラ、チンカラ」
て言うずもの。

「あれ、なんだべ、おらえのおどつつあ、おらだば探ねて来たのであんめえか、
出てみっぜ」

て、二人で出てみたば、まぎれもない、目は見えねども、自分の父親であつた
ど。そしてこんど喜んで、あんまり喜んで目開いだずも。そして大喜びして、三
人で手取り合つて泣いで、そして家さ無事に帰つてきて、母親は、

「とてもこんな悪い氣持のもの、おかんねがらはあ、置かんね」

て出さっただけど。こんど娘二人と父親で、仲よく暮したけど。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

13 三人兄弟

むかしあつたけど。

正月の二日の正夢を晩げ見たら、みんなで語り合うことにして寝たど。その一番の末の子が、

「いい夢みたときに、決して人に言うもんでない」

と、そういう話を聞いていたというわけよ。そして次の朝げに三人で集まって、

「おれはこういう夢を見た。お前はどんな夢みた」

ていうたところが、決していい夢見たときあ語るこんでないというもんで、一

番末の男の子あ語らねというごんだ。

「三人で約束したな、語らねつあなんだ」

そして、三人で約束したなが守らね。強情だと言うんで、あんにや兄だかが、

「お前みたいな損居士そんこじ（へそまがり）もの家さ置かんねから、島流しにする」

て、箱さ詰めらつて、流さつたというわけよ。どこかの海だかに流さつて行つて、拾わつて、一本の棒片方が青くて片一方が赤い棒を拾つて、それを持つて歩いて、金持の家の前に、きれいな女いるど。ちよこつといたずらに鼻のあたりを突ついたり、頬つぺのあたりを突ついたりすつど、なんぼか、そこふくれておがることだと。

医者にかけても、典者にかけても治らね。そんときその男は易者になっていたど。

「そういうことになった病氣治すには、その赤いところで突いて、そういう風になったの、青いところで突き治せば、もとの顔になる」

とな。その易者に掛かったらどうだ。評判になって、そういういたずらをして、

鼻を高くしたり、頬ほつたぶをふくらしてみたりして、まず悪いことしたというだ
ごで。ほだども、利口だから後の仕上げにそういう易者になり、これは青い方で
突つくと治ると易に出たから、ほんじゃ、おれ治してあげる、とな。そして歩
いて治しているうちに、なんぼかええ大家の簀すいにのぞまつで、その簀すいになったど。

んだから、それから言ったものやら、

「いい夢みたら、決して人に言わねとええ」

ど。むかしとーびん、さんすけびつたり釜かまのふた、灰あくで磨けばええ銀玉、なあ、
さんすけふんはい。

14 兄弟話

むかしあったけど。

あるどこに大勢の子ども持ったじんつあとばんつあいでやったど。子ども大勢

のために、働いても働いても身上はよくなんねがったど。そしてはあ、とうとうはあ、子ども大きくなつたども、何にも与えらんねで死ぬうになつたずも。そんな時、父親、子ども皆集めて、

「お前だには、何にも残して呉れつことでないようなもんであつたども、おれあ、金甕、裏の畠さ埋めておいたから、どこだなんて教えねども、お前だで一生懸命で、畠、隅から隅まで掘ってみろ、そうすれば、出はつから」

で、こう言うて死んだど。そうすつど兄弟ではあ、一生懸命で、毎日、

「三尺も深く掘んなねぞ」

て教えたど。そして一生懸命で掘って行くども、なかなか出ないずもの。その金甕。そうすつじど一人の兄弟、

「おらはそんなことやめた」

て、別な仕事についてしまつたど。そのうちにまたその別な兄弟、

あした
「明日も掘つても出ないし、今日も出なかつたし」

一人やめ二人やめして、とうとう辛棒つよいのが、一人になつたど。そして隅

から隅まで掘って、掘った土も唯置かんねから、耕したわけだど。そしたら野菜でも何でもよく出来るど。そして終る頃になったとき、その息子は気付いたど。「父親の言うたのは、金甕でなく、土を深く掘れば掘るほど、作る物がよく出来ると、こういう教えであつたな」

て、氣イ付いて、それから一生懸命で百姓に精出したために、大金持の長者になつてあつたけど。んだから人間で真面目に一生懸命に働くもんだど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

15 孝行息子の藤六

むかしあつたけど。

ちようど大石沢の部落と同じようなところに、孝行息子いて、親は年寄って、そ

して床に臥せて、毎日何も持っていっても、碌に食べれねから、

「おとうさん、何か食べたいものはないか」

て、息子きいた。そしたら、

「何も他に食べたいものないども、今は寒の内だ。寒の鰯でも食べたなら、何ぼか丈夫になれんべから、無理なお願いだべども、寒の内の鰯たべたい」
て。

「それでは、おれ、まずここから入って行けば蒲沢という沼あつから、あの沼でも探したら、鰯釣られつかもしんねえから……」

て、まず釣竿もってカンジキを掛けて、今日のような雪降りに出かけて行つたど。そうしてずうっと沼のほとり探したば、とてもビクビクという鰯、元気よく二匹も釣れたど。

「いま一匹も釣りたい」

て思つたば、三匹も釣れだずも。そうして今度持つて来て、まずそれを味噌煮にすつど、一番栄養あるそうだから、味噌で煮て食べらせたど。そうしたら、

おとうさん喜んで食べて、そしてよっぽど元気づいて、

「いまと何か食べたいものないか、おとうさん」

て言うたら、こんど、

「寒の内の筍食べてみたい。筍に鮎に両方食べれば、いま一回起きて働かれるようになっかもしんねえから、寒の内の筍食べたい」

て。そしてまた蒲沢の方さ向って行って、滝（部落）との分かれっどこに、長者屋敷という、むかし長者住んだらして平らな屋敷ある、そこさ行って、そのほとりの峯さずつと探したら、向いは峯で、山の神峯で、山の神さま祀ってあったそうだ。そこからずつと入って、あの峯この峯と探したば、ようやく小さい筍見つけて、そうして帰ってもどり足にはなつたものの、腹空^すいて腹空^すいてはあ、とても家さ来らんねし、眺めたばその脇の方に、ほのかに灯り見えつから、そこさ行ってトントンと戸を叩いたど。そしたば、なんぼ呼んでも声しなかつたずも。

「まず、こがえに腹空^すきたもの、何かあつかもしんないから、建物あるもの」
て、戸を開けて入って行ってみたら、戸棚、わるいと思ひながら開けてみたば、

まだ搗きたてのような牡丹餅あつたずもの。それ食べて、そしてこんど、

「山の神さま、空家^すだども、腹空^すきてたまらないから、御馳走になつて行く」

て、山の神さまの方さ手合^あせて帰つて来たそうだ。そして筍食つて、喜んで、その父親も元氣になつて雪の消える頃になつたら、また二人でむつまじく暮して過ぎたど。

むかしとーびん、さんすけびつたり釜のふた、灰で磨けばええ銀玉、ハア、さんすけふんはい。

(高橋しのぶ)

16 カタコの孝行

むかし、病気で臥^ねてて、我俣な年寄あつたずかな。まず、寒の内に、筍食いた
いとかと言うもんだから、

「いま筍なんてあるもんでない」

ども、せっかく年寄食いたいと言うども、あるでもないども、気休めに竹のあるどさ行つて見んべと思つて、竹のあるどさ行つたれば、筍出であつたのかな。そしてそれを採つてきて、年寄に食せた。

こんどそれを食つてまた、

「寒のうちの鮎^{あじ}つて、なんぼかうまいもんだと聞いたが、鮎食いたい」

て、そう言つてねだられるものだから、またあるもんでないと思つたども、行つたれば、木さ下^{さが}つてあつたてな。ふらふらど。そうしてその鮎を取つてきて、焙^かつて食せつか煮て食せつかと思つてくる途中で、とつても疲れ、ひどいから休ませてください、よくよくのぼつこれ小屋の火さあててもらつて、休めてもらつて、そして立つとき、

「すまない話だが、おれの年寄死んで、この雪に投げるに投げらんね、困^{こも}つて菰^{こも}さ包^{くる}んでだが、お前の火に当てたり、休めたりした代りに、死人を背負つて、その途中さ投げて行つてくる」

て頼まつで、死人を背負つて来たというた。その死人背負つて帰らんねし、こちらの崖から投げっかなあと背負つてた縄さ手をかけつど、

「カタコ、カタコ、投げべと思うなよ」

て、そう言われ言われして、なんとも仕様なくて家さ背負つて来て、

「こんなもの背負つて家さ入れば、家の、寝てる年寄たまげるから、そろつと勝手口から入つて降ろすべ」

て思つて静かに降ろした気だつたずども、そのとたんに、ジャクツという音すつけど。年寄は、

「ははあ、何背負つて来た、カタコ。何かジャクツという音すつてあ、何背負つてきた」

て言うども、こういうもの背負つて来たといわんねわけだべ、

「何にもないなだ。何にも背負つて来たんでないども、雪だらけの足で入ったから、ゴツンと言うなだべ」

「いやいや、カタコ、カタコ、お前は今までは親に孝行して呉つじやが、おれ、

これほど聞きたいと言うものを、お前はおれに教えないようなもの家さ背負い込む
じあ、あるもんでない。そんでは今迄の孝行も水の泡だ。大した親不孝ずうもん
だ。お前は……」

て言わつて、

「実は、こういうものの背負ってきた」

とも言いかねて、勝手さ行つて見たつうなだ。そうしたば、それ大判小判ジャ
クジャクとなつてやったつてな。それも親孝行したおかげだという。こういう話
だべ、むかしとーびん。

(高橋きみの)

17 親 孝 行

むかしあつたけど。

立派な若衆いたけど。なんでも母親は何してか、殿さま無理に上げらつてしまつて、そして今度父親と二人で暮したけど。そして何とかして母親ば、つれもどしたいもんだとも、殿さまの意向なんてつよいもんで、とてもおらだの力でつれもどすことはできないし、困ったもんだと思つて泣き往生してはあ、父親と暮したけど。

そしてあるとき、こんど、何でも灰で縄なつて出せば、何でも思うことかなわせるつて、そういう書き出し貼つたずも、街道さ。

「んでは、どうしてなつたらええもんなんだか」

何んとかして、母親ば助けたいは、いっぱいだども、まず工夫して、そしてこんど母親ばつれもどしたい一心で、さまさま考えてみたずもな。それからこんどなるだけ藁、よつく打ぶつて、そしてこんど、丈夫な縄なつて、ここで焼いたけど。そしたば、そくつとそのままの縄なつてなあ灰で、それをそっくりこわさないようにして、殿さまさもつて行つたば、

「よく賢い息子もつた、このくらい一心に考えて、孝行さつたごではあ、無理に

母親おきば押えて置くわけに行かねから、帰すから……」
て、帰されだども、腰も曲るようになってから、ようよう返してもらって、親
孝行したけど、とーびん。

(高橋しのぶ)

18 孝行息子

むかしあつたど。

これ持つて行つて埋めてくんねえかと頼まつたど。それ、やんだと言わんね性
分なもんで、それ背負つてきたど。

「とても、こんな夜埋めらんねから、明日に埋めんべ」

て思つて、自分の庭さおいて、次の朝げになつてみれば、みなお金になつてた
て。

19 笠 地 蔵

むかしあつたけど。むかしの人あ、ゴザ織ったり、笠作ったりして、小国の町さ売り出して暮し立てったもんだ。

それ、弥蔵というおじいさんとおばあさんがいて、おじいさんが、そのゴザと笠売って正月の買物して来るて言って行つたど。

叶水の向うに子持峠というところある。そこまで行ったら、地蔵さまが正月頃だから、みぞれに打たれて寒そうにしていたど。おじいさんが売るつもりゴザを地蔵さまに着せて、売るつもりの笠をかぶせて家さ帰った。

「ばさ、ばさ、子持峠まで行つたば、地蔵さまが寒そうにしたらから、ゴザ着せて、笠かぶせてきたわ。正月の買物は何も出来なかった」

こう言うた。と、ばさま、

「ええがった、ええがった。おれたちはこうして家にいるから、二人で話して何もない年夜をしたわけだ。むかし年夜根っこ、年取り根っこ言うて、割れない木をくべたものだ。その根っこで背中あぶりして二人で寝んべ」

て、寝たど。そうすつど、音聞えた。

「ヤンゾウの屋形ざどこだべな。エンヤラサ、ドッコイシヨ」

て、村の若衆、何、ふざけていんなだか、て二人で語っていたど。そのうちに、
「ここだ、ここだ」

て、戸を開ける音して、ガラガラ、何か土間さ入れて行つた。そして元日の朝
げ起きてみたら、着物から、アキアジ（鮭）だのいっぱい御馳走あつたど。地藏
さま恩返しに來たなだと言つたど。

むかしとーびん。

（川崎みさを）

20 金の斧・銀の斧

むかしあつたけど。

向うの山中のところに、木伐りを専門にするじさまいでやつたど。そしてこんど、ある日、川端で大きな木伐っているうちに誤まって、斧まさかりを川の中に、ドブンと落してしまつたど。そして正直なええじさまであつた。

「いたましいことした。あれなければ、仕事もできないし……」
て、こう一人ごと言うていたけど。そうしたら川の中から年いつたおじいさんが出てきて、

「じさ、じさ、いま落した斧拾つて来てくれるから」

て、そう言うたど。そして金の斧をもつて来たど。そして、

「お前の落したのは、これだか」

て、こう言うたど。

「いや、そんな立派な斧でない」

て、そう言うたど。

「ほんでは、また別な探して来るからな」

て、入って行って、こんどは銀の斧持ってきたど。

「お前の落したのは、そんではこれだか」

「いやいや、そんな立派なもんでない。鉄で作った斧だ」

て、こう言うたど。そしたらこんど、またもぐって行って、本当に落した斧拾つて来て、呉^くつたど。そしてそれと同時に、金の斧も持ってきて、

「お前は正直ものだから、これも呉れてやる」

て、その斧もらって来たど。そしてそれを聞いて、欲の深いじいさんが、

「よし、おれも行つて金の斧もらって来よう」

て、こう思つて行って、斧をわざと、ドボンと投げたど。そしたらまた同じような白髪のじいさんが現わつて、

「ああ、お前の斧拾つて来てやる」

て、こう言うたど。そしてこんど拾つて来たのが、金の斧、やっぱり持つて来

て、これだか、て聞いたど。「ああ、それだか」「それだ」てそう言うたど。そして、

「この嘘つきはあ、落した斧はそっちの方だ」

て、わざと投げた斧の方与えらつて、金の斧はもらいばぐつてあつたど。わるい心掛けでは、わるいもんだど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

21 なら梨とり

むかしあつたけど。太郎と次郎と三郎という兄弟あつたど。

母親が病気で寝てて「梨食いたい」て言うたて、孝行な子どもで、山さ梨とりに行くことにしたど。

「途中さ年寄がいるから、その年寄に聞いて、行つてええと言われたら行け、行くと言わつたら行くな」

て言わつで行つたど。行く途中で年寄のじさまに行き会つたんだど。そして道を聞いたところ、じさま、

「行くと、道になんぼか太い藤づる這^はつてるから、その藤づるをダンと踏んで、切れたら行つてええし、切れねとき行くな」

て言うたどな。行つたら藤づるあつたので、踏んだら、それ切れねがつたど。んだども、あがえ食いたいがるもの、一つでもええから食せたいと思つて、かまわず行つたど。

こんど行くと、大きな牛寝てつから、どんと踏んで起きたら、行けばええし、起きないときは行くなと言わつて、それも起きないで動かないのに行つた。

そして今度、一番しまいに大きな滝あつから、その滝の音、氣イ付けて聞いてると、行つてもさしつかえないときは、

「行けさんさん、行けさんさんと落ちるし、行つて悪いときは、戻れさんさん、

戻れざんざんというから、その滝のときはもどれ」

食せたいまんまで、聞かねで行ったずなだな。そして梨の木に登って、もぎ始めて、何か一つ目^{まなこ}光らせた化物、暗くなつて出たて言うなだな。それから、

「上から食うべか、下から食うべか」

て出はつて来たど。そして段々に登つて来て、化物に引ずり落さつて食^かつたのだな。それからこんど、次郎が行つて、年寄に会つて聞かされて行つて、最初は藤づるは切れなかつたし、牛は起きなかつたども、それ聞かねで滝さ行つたら、行くなというのを、それも聞かねで行つて、同じに食わつたど。

三郎は年寄に行会つて、藤づるは切れたし、牛も起きたし、滝も「行けざんざん」て言うし、喜んで行つて梨の木に登つて梨をもいだ。化物は引ずり落ろす気になつて、足さ、化物が手を掛けつど、その化物の手をもいでした。そしてまくり落ちたどこさ降りて行つて、格闘して、

「許さんね、おれたち兄弟、みな食つた」

て言うたらば、

「生命だけ助けて呉ろ、太郎も次郎も死なねで腹の中さいたから」
て、そう言うたどな。そして腹さいて見たら、二人とも元気で出てきた。そして、梨、三人で背負って母親に食せて、母親の病氣治って元氣になったって。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

22 三枚のお札

むかしあったけど。

ある山中のお寺に、和尚と小僧一人いたけど。そしてこんど、退屈して小僧は、
「和尚さま、和尚さま、今日はあるまりええ空だから、退屈だから栗拾いにいつて、なじよだべ」

て聞いたど。そしたば、

「行くはあんまりええども、一人で行くのは心配だから、三枚のお札呉くつでやつから、もしか何か何ごとかあつて、恐おそいことあつとき、この札用立てろ」
てな。

「決して使うときは前の方さ投げねでな、後ろさ投げろよ」

て教えてやつたど。そうすつど、そこのお寺の裏の高い峰のぼつて、栗拾いしつたば、山婆はば出はつて来たど。

「何だか、これは恐おそいことある」

「小僧、小僧、なにしつた」

て言うから、

「おれ、栗拾いに来つたんだ」

「おらえで休め」

て言つたど。こんど、

「暗くくなるし、おらえさ泊れ」

て泊とまつたところが、そうしたらば、何だか雨降ふつてきたようだな。ばさま

に抱つて、その雨の音聞くど、

タンタン タヌキのナカダヌキ

抱いたる稚児の顔面つらを見ろ

て言うたど。そして異な節の雨降るもんだと思つて、また聞いっただらば、

タンタン タヌキのナカダヌキ

抱いたる稚児の顔面つらを見ろ

て言うずも。そしてこう見たらば、なんだかほに、恐ろしげな顔面の婆さまに抱かつていだのだずもな。いやいやして、こうしてはともいらんねから、逃げなんね、どういう方法したらええんだかと思つて考えて、まず、

「婆さん、婆さん、便所さ行きたくなつたから、おれ行つてくる」

「行くなんて、嘘語つて逃げんのでないか」

「決して逃げんなでない」

「ほだら、決して逃げんのではない」

「おれ、つないでやっから、帶出せ」

て、細引でつながつて、そして便所さ行つて、

「小僧、小僧、まだだか」

「まだか」

「小僧、小僧、ええべはあ、上がつて来い」

なんて言うど、

「まだだ」

そしてこんど木さ細引縄ゆつつけて逃げ出して、

「小僧、小僧、まだだか」

て言うても、小僧音しねもんだから、この婆さ追っかけはねた。いや小僧は逃げた逃げた。なんぼ逃げてても逃げてても追っかけて来るし、振返すと、まだ追っかけて来つから、「山でろ」て後ろの方さ投げたば、大きな札のおかげで大山でて、その山登つてくるうちに、小僧はまず、ズンズン逃げて来たども、また追いつめらつて、こんど恐つかなくなつたから、「川出る」て後ろさ投げたれば、大川出て、そうしてこんどその川越えるに大難儀してゐるうちに、婆さばいゝうちに、よつぽど

進んできたども、また追いつかれるようになった。んだから、こんど、「火出ろ」て、札投げっど、その方、大火事になって、そんでよっぽど手間どっているうちに、やっとかけついて、

「和尚さま、早く、恐つかねものに追っかけらっで来たから、早く早く、どこさか隠して呉ろ」

て言うたば、和尚さま、

「まず、どこかええんだかなあ、その井戸の上さでも上がれ」

て、井戸の上さあげたそうだ。そしたらこんど、その山婆追っかけて来て、

「ここさ、小僧来たか、どこさか隠したか」

「おら、そんなもの知しやね」

て言うたど。

「知しやねえざあない」

「ほだら、どこでも寺じゅう探してみろ」

て探したどもいない。段々さがして行ってこんど、井戸ンどこさ行ったば、井

戸の中に、小僧の顔^っ見えつずもな。

「ああ、井戸の中にいた。小僧許さねぞ」

て、氣イ揉むと、こんど井戸の中さザボンと自分落ちてしまつたわけだど。そしてとうとうそこでまず、難を逃がれて、婆^ばさは何とか勝負したべし、まず小僧は何なしに助かつたど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

23 鬼婆むかし

むかしあつたけど。

おらえあたりのような山奥にずっと旅人がさしかかって来たど。そしてこんど、夕方になつたもんだども、いまちいとは行かれっからと思つて、行つたばよくよ

く山の傍に一軒の家あった。そしてそこさ行つて、

「今晚わ、泊めて呉んねか」

て頼んだども、音すねから、入つて、そして入つて行つてみたども、何だか人間の住むような家でないし、ツシ（棟）さ上がつて隠れてだど。そうしていたば、

「ああ、寒い寒い、こんな寒い日はまず甘酒でも温めて飲むか」

て、鬼婆入つて来たど。そうして炉さ火焚いて、甘酒温めたど。

「甘酒でも温めるうち、まず背中あぶりででもすつか」

て、背中あぶりしたど。そして青苧殻おのがら、ツシに上げて置いたな、その長いので

その甘酒、ツシから青苧殻おのがら、こおう下つゆげて寄越して、皆吸つてしまつたつて。腹減つたもんだから、そしてこんど汁つゆの吸い上げた頃、鬼婆目覚めて、

「甘酒温まつた頃だべ、飲むかな」

て言うたら、甘酒みな乾ひつてしまつて、皆ないど。

「さあさあ、火の神さま飲んでしまつた。んでは餅でも焙つて食うかな」

て、餅焙ぶつたつて、そうすつど、

「まず、餅のあぶれるまで一休みだ」

て、また眠たつて。そうすつど、上から青苧おのがら殻で、餅チヨキツと突ついては引張り上げて食い、餅チヨキツと引張り上げては食いして、みな食つてしまつたつて。そして鬼婆、

「はて、あぶれたかな」

て、後ろ向いたら、また餅ないど。

「さあさ、また火の神さまに食わつてしまった。こんなときは早く眠んべ、ほだとも、雪も降るし、今夜は木の唐戸さ寝たらええか、石の唐戸さ寝たらええか、寒いから木の唐戸にすんべ」

なて、木の唐戸さねたど。それからその旅人、降りて来て、大きな釜さお湯沸かしたど。そして鬼婆の寝た木の唐戸さ行つて、キリでキリキリともんで、孔あけたど。

「今夜は、うらのキリキリ虫はひどく鳴く」

て、こういうずもの、そうして孔あけてお湯煮立ったな、孔から煮湯をつぎ込

んだど。

「切ない、切ない、切ない」

て言うども、唐戸さ錠かけたもんだから、出らんねぐなつてはあ、その旅人にその鬼婆は殺さつてしまつたけど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

24 食わず女房

むかしあつたけど。

ある田舎に若い息子いだども、親も誰もなくてはあ、たった一人で暮しつたけど。そうしてこんど、一生懸命で稼いで働いて、働き抜いて、身上築くべと思つて、働いて、たと食へものも食へないで一生懸命で働いっただけど。そうしたば

ある晩方、若い女来て、

「おれば今晚泊めて呉^くんねえか」

て、そう言わつて、

「おれ、一人で何も御馳走も出ないし、泊めることはでない」

て言うたども、

「御馳走など何もなくてもええから泊めてだけ呉^くろ」

て言うたずも。そしてこんど、

「そんだら、あまりええから泊れ」

て、そしてこんど、泊めたら、なんぼ飯炊いても、自分食^かないで、旦那にばり食せて、そして稼^くぐなんていうことして、

「よく生きてるもんだか」

て思つて、旦那も不思議立てつだど。そしてあんまり不思議だから次の日、

「おれ、今日は遠^とかい町まで行つて来つから、峠もあることだし、昼飯握つて呉^くろ」
て、そして握り飯の大きなのもらつて出て行つて、脇^{わき}さ出たふりして、この天

井さ上つて隠れて、そうして一人で留守居してたと見ただけ。大きな鍋さ三升も五升も炊かれるような鍋さ、いっぱい御飯炊いだずも。そうして何するもんだかと思つたば、こんど握るわ握るわ、御飯出たば握り飯の十も二十も握って、そしてこんどは、きれいに結つてだ髪解いだずも。そうしてこんど、

「次郎も食え、太郎も食え」

て、みなその自分の頭の髪の中の大きな穴の口開いっだどさ入つてやつこんだど。ほうして恐つかなくて、恐つかなくて、晩方、そろつと帰つて来たば、またきれいな髪結つてたけど。そうしてこんど、ほれ、

「何だか米もたんと（余計に）穫れないし、一人で暮すから、そがえにいつまでも泊めて置かんねがら……」

て、そう言うたずも。そうしたら、

「そんなこと言うたつて、おれは帰らんね。かがにもらつてもらつたもんだからどうでも置いて呉ろ」

て言う。こんどはあ、恐つかなくなって、恐つかなくなって逃げたずも。一生

懸命で……。逃げた逃げた、後振り返せば、追っかけて来っし、それからこんど仕様ないから、隠れ場所ないか、ちよいと見たば、背の高いヨモギ生えっただけど。その中さ隠っだずも。そうしたば、こんど。

「どこにいたべ」

て、そこ、グルリグルグル廻っていっども、見つけないではあ、戻って行つたずす、そうしてこんど、そこさ隠っだども、こんどいた模様もないし、見たば、その日は五月節句だな、氣付かねで、その、鬼除けに菖蒲とヨモギ、窓際から玄関にさすの、ささないで、鬼にねらわっだんであつたんだど。

んだから、毎年五月の節句には菖蒲とヨモギを忘^{わす}んねで、部屋の入口から窓ささすもんだけど。その嫁は蛇だったど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

(笹巻いて、その笹っ葉、蛇さわっど、味噌変っどわるいから、味噌桶さ貼るのだど)

25 ネズミ浄土 (1)

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいで、じんつあは山さ火野^{かの}うないに行つたど。一生懸命でうなつてはあ、昼飯^{ちゆうはん}食つて、木の根っこさ腰かけて、昼休みしつたど。そしたば根っこの下の孔からネズミ一匹チヨロチヨロと出はつて来て、「ええ空だ」て、そういうど。そうすつど、中から大勢のネズミが、こんどゴザ引張り出したど。そしてこんど、地藏さま持つて来て立てたど。それからそのゴザひろげて、金いっぱい持つてきて干したど。ゾロリとそのゴザの上いっぱいに。

そうすつど、じさま、そつと根っこから降りて、その金、弁当風呂敷さ包んで家さ帰つてきたど。そうして、

「ばさ、ばさ、今日はこ^ういうええことあつた」

て見せつたど。そうすつど隣のばさま来て、

「なんと、おみたち（お前たち）、こ^らほどのお金、なじよしてもうけやつた」

「おらえのじさ、火野うないに行つて、これこれで、ネズミの干したな、さらつて来たど」

て、こ言うて教えたど。

「ほんでは、おらえのじさまもやんなね」

て、家さ帰つて行つてはあ、じさまに教えたど。そうしてじさまもそこまで行つたども、火野もうなわねで、根つこの上さ休んでいたど。そうすつどやつぱりお天氣なもんだから、ネズミまた出てきて、「ええ空だ」て言うど、またゾロゾロと出てきて、地蔵さま持つてきたど。そのうちに、じさま、小便出てきたずも。降りてたればええことに、木の上からジョウジョウとたれたど。そうすつど、

「地蔵さま、地蔵さま、雨降つてきた。教えておくやい」

て、地蔵さまは、

「雨降つて来た、雨降つて来た」

て、教えたわけだど。そうすつど、ネズミ出てきて、みんな金しまったど。そんで、ただ帰つて来たど。人の真似してもうけんべなんていうことするもんでな

いど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

26 ネズミ浄土 (2)

むかしあつたけど。

じさま、おにぎり、穴さ落してやって、それを拾いに入ったら、それ、ネズミの家で、そしてネズミの家で、スルスで金搗きしつたど。

百十になるまで

猫の音聞きたくない ザクモク ザクモク

じさま、手使つて搗いで呉^くつで、そして駄賃にお金もらつてきたど。そしてまた隣のばさまが、やつぱり出てきて、じさまが言うど、そのじさまが真似して行つたつて。そしてこんど搗^すいて助けたども、

「これ、あるだけ持って帰られる」

て、猫の真似して、ニャオーて言うてしまったど。そうすつど、

「さあ、猫来たから、穴くけろ」

て、みな穴くけらつで、その中で、じさま死んでしまったど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

27 団子浄土

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやと、二人暮しの家あつたけど。ばんちやは家さいて御飯出し、じんつあは早く起きて、お庭掃きたけど。お庭の隅の方から団子転んで来たど。一つ。そして食うべと思うずも、コロコロ・コロコロと、どこまでも転ん

で行って、拾わんねで、チヨロっと、お庭の隅の穴さ入って行つたど。そうすつど、じんつあ、その穴、追っかけて行つて、

「団子、団子、どこまで」

て言うど、

新座の宮の　コケラ葺きの

お堂の石地藏の前まで　石地藏の前まで

て、なんぼ追つかんねで、そう言うて追っかけて行つて、止まったとこ見たば、コケラで葺いた地藏さまのお堂あつけど。団子、そこさ行つて、

「地藏さま、地藏さま、ごめんなされや」

て、じんつあ、入って行つたずも。そしたば地藏の膝の上さ、団子上つてしまつたずも。そして、

「地藏さま、地藏さま、おれももう少し入って行んから、ごめんなされや」

て、じんつあ言うど、こんど地藏さまの手のひらさ上つてはあ、地藏さま、クイツと食つてしまつたどはあ。

「地藏さま、おれ追っかけて来た団子だけはあ、食ってしまったが」

て言うたば、

「おれ、あんまりうまそうな団子で、おれ手さ上ったから、堪え切れねではあ、食ってしまったから、その代り、晚げええことあつから、おら家さ泊れ」

そして、泊めたずも。そして、

「赤鬼、黒い鬼と大勢来て、バクチ打ちすつから、それ見てて、夜明け方になつたら、おれ、衣の袖の中さ入つてで、鶏の真似しろ、そうすつど、鬼共みんな引上げつから、そしたらそこさひろげつた金、みなさらつて行つてええから」

て、そう言つて教えたど。そしてこんどいるうちに、赤鬼や黒鬼、白鬼さまさまの鬼共あつまつて、地藏さまの言う通り、札ひろげたずも。「丁だ半だ」てやつたど。そうしてこんど、いま少しで三時、四時にもなる。大抵ええかなと思つて、鶏の真似して、コケコーて言うたずも。

「ああ、鶏鳴く、早く帰んねど、親方におんつあれる（叱られる）から、歩えべ、歩えべ」

て言うもんではあ、札ひろげたまんまはあ、時間に遅れたとみな鬼逃げたど。
それから、

「その札はあ、みな地藏さま、それ持って帰れというもんだから、団子代りだから持って行け」

て言わつて、持って来たけど。そしてばき喜んで、何かお菓子を買ったたり、うまいもの買ってはあ、お茶飲みしつたどき、隣のばさま来たずもの。

「なんと、なんと、こらほどの御馳走、なじよにして買ったもんだ、おら、何も御馳走ない」

て言うたらば、

「おらえのじんつあ、こういうあんばいで、そして買って来て、お茶飲みしつた。

ほだから一服あがれ」

て言うたど。

「ほんじゃ、おれも早く行って、隣のじんつあなど団子追っかけて行って金もうけして来たから、そういう風にしてみる」

て言うたぞ。そしてこんど、お庭掃きしたらば、やつぱり団子あつけど。なんぼ掃いても転ばねな、無理無理穴さ入つてやつたずも。そしてこんどはあ、行つたばやつぱりコケラ葺きのお堂さ地蔵さま立つてやつたけど。そしてこんど、無理無理はあ膝さ上げてやつて、地蔵さま食つたずもはあ。

「そんでは、おれ食つたごたもの、そのうちに鬼どもまた来つから、泊つていろ」

「そして札ひろげたら、いつまでも見てて、ちやうど夜明けの頃になったら、鶏の真似しろ」

て言うたの、あんまりいっぱい札ひろげらつたとこ見て、堪りかねて、あんまり早く鶏の真似したずも。すつど、

「なんだか、まだ時間見れば、早いようだ、あまり一刻いっときに鶏鳴く勘定ない。何だか人の匂いもするようだぞ、早くそこら探せ」

て言うもんで、大騒ぎして探したば、地蔵さまの衣の陰さ隠つていたな見つけらつたぞ。そしてさんざんいじめらつて、泣き泣き家さもどつて来たけど。ばさ

ま、

「おらえのじんつあ、なんぼいっばい銭もらって来んだか、そしたら浴衣でも買つて、くんべ」

なて、古い浴衣放^なげて待ちていたずも。裸みたいになつて。そうしたば泣き泣き来たずも。そしてそれ聞いて、

「なんぼもらって来たんだか、まず喜んで、唄うたって来た。ええあんばいだ」
て思つたらば、さんざんいじめらつて、泣き泣き来たど。んだから、欲ばつて人の真似するもんでないど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

28 花咲じじい

むかしあつたけど。

草すず、豆すずというじさまが、い・で・や・つ・た・つて。草すずというのは意地悪じいさんであつたど。それから豆すずというじいさんはえ・え・じいさんで、川さ梁やなかけたど。そして頭かしらさ豆すずじいさんかけたら、大変魚とれるど。

そしたら、草すずじいさん、

「そんでは、おれも頭さ掛けんべ」

て、また頭さ掛けたど。そしたばクイゴコ引掛つたど。

「こ・い・つ・つ・け・な・もの引掛つて、魚でも引掛ひかんねで」

て投げてやつたど、尻さ。そうすつど、豆すずじさま梁さ引掛つたど。そうして豆すずじさは、

「今朝は、なんぼ引掛つていたかな、魚」

て行つてみたば、ちっちゃいクイゴコ引掛つていたずも。

「いや、めんごいこと、これ持つて行つて、飾っておくべ」

て思つて、家さ持つて来て、大事にわが子のように育てておいだど。そうしたば、段々に大きくなつてはあ、じさまが山さ木切りに行くて言えば、

山^{なた}刀^のつけろ、クエンクエン

蓑^{みの}つけろ クエンクエン

て言うど。かわいがつていたば、ある日、

鍬^{くわ}つけろ クエンクエン

かますつけろ クエンクエン

そう言うずもの。そして鍬、背中さ着けたらば、「じんつあものれ、クエンクエン」。

そうしてのつたらば、裏の畑さつれて行つたど。そして畑の隅^{すま}コさ行つたば、「ここ掘れ、クエンクエン」て言う。それから、じさま一生懸命になつて掘つてみたば、大判に小判ざくざくと出てきたど。そしてはあ、かますにどっさり詰めて、そうして家さ来てやつたど。そしてその大判・小判出して、ばさまに語つて聞かせつたどこさ、隣の草すずじいさ来たずも。

「おや、豆すず、豆すず、こらほどの金、なじよにして儲けた」

「いや、おらえの犬は、これこれで畑の隅コ掘つたば、こんがえに出て来た」

て、そう言うて教えたど。

「おれにも貸して呉^くんねえか」

「ああ、ええどこでない、持つて行け」

そして借りで行ったども、つけろと言わねずもの。んだども、無理矢理鍬にかますに、つけてはあ、行きたくもないなあ、引っぱって行つたど。そして掘つた近くさ行つて掘れとも言わねな掘つてみたど。そうしたば牛の糞だの、馬の糞ばり出てきてあつたど。お金出て来ねずも。

「こんな犬はこうして呉れる」

て、鍬で叩いて殺してしまつたど。そしてはあ、そこさ犬ば埋めて、掘つたのさ、しるしに松の木一本植えてきたど。そして来て、

「豆すず、豆すず、あんな犬は嘘つき犬で、とても駄目だから、殺して、おれ埋めてきた」

「いや、むごさいこと、さつだもんだなあ」
て言うたば、

「しるしに松の木一本植えてきたから、行ってみろ」

て、こう言わっだって。そうして行ってみたら、見てるうちにその木がグングン、グングン大きくなっただ。そうして大きくなっただから、じさまは伐つてきて、スルス作っただ。そしてばさまと二人で、

松の木のズルスの コンズルス

よう噛め よう噛め

て、そう言うて挽いただ。そうしたば、じんつあの前さは大判、ばんちやの前さは小判も出て来っだ。ざくらざくらと挽くたびに。そうすっだまた隣の草すずじさま来て、見て、見つけでしまただ。そうして、

「豆すず、豆すず、そんなええスルスだら、おれにも貸してくろ」

て、また借りて行っただ。そうして挽いただ、ばんつあ。そうしたば、ばんつあの前さは牛の糞、じんつあの前さは馬の糞しか出ないずも。こんどまた怒って、それ、ぶち割ってしまったて、竈さくべてしまっただ。そうして豆すずじさま、何日経っても返しに来ねもんだから、

「おれのスルス、返して呉^くろ」

て行つたど。そしたば、

「あんなスルス、あるもんでない。出るものは糞^{くそ}ばりだ。ほだからはあ、焚^{くわ}いてしまつた」

て、こつ言^いうたど。それから、

「困^こつたことさつだもんだな」

「そこに灰^{はい}あつから持つて行^いげ」

て、こつ言^いわつた。それから灰^{はい}、箆^{へら}さ入^いつて、まづ貰^{もら}つて来て、軒^{のき}場^ばさ置^おいたど。そのうちに、風吹^{かぜ}いて来て、向^{むか}い山^{やま}さとんで行^いつたずも。そしたば、まだ桜^{さくら}の花も咲^さかないうち、花咲^{はな}いたど。その木^きさ。

「いや、これは面白い灰^{はい}だ。そのうちに殿^{との}さまここ通り掛^かつから、一つ花咲^{はな}かせてみせんべ」

て、その豆^{まめ}すずじさま、箆^{へら}さ入^いつた灰^{はい}持つて、殿^{との}さまの通^{とほ}る日^ひ、待^{まち}ちでいたど、木^きさのぼつて。そうすつど、殿^{との}さまは遠^{とほ}くの方^{かた}から、「下^{した}に下^{した}に」と来^きたど。そう

して、

「そこにいるじじい、何じじいだ」

て、先払いが言うたど。

「花咲じじいだ、枯木に花を咲かせる」

て、こう言うたど。

「それでは、一つ咲かせてみよ」

て、殿さまが言うたど。そうすつど、

チチンブンブン 五葉の松

て、その灰を振ったど。そうしたば、パァーと咲いたど。いや、殿さま扇開いて、「これは、みごと、みごと」て、お賞めになつて、宝物どつさりもらつて来たど。そうして家き来て、ばさまに見せたば、また草すずじき来て、

「こんなにたくさんさんの宝、なじよにしてもうけた」

「いや、殿さまに、お前どこから持ってきた灰で花咲かせて、もらつて来た」

て、こう言うたど。

「よし、そんでは帰りに、おれしてみんべ」

そして残つてた灰、かき集めて、箆に入れて、登って待つてだど。と、殿さま
帰りに、「下に下に」て来たど。それから先払れ、また見つけて、

「そこにいるじじい、何じじいだ」

「花咲じじいだ」

「それでは一つ咲かせてみよ」

て言うたど。じさまは言う言葉も知しやねもんだから、ただ無性に投げたど。
そしたばさつぱり花咲かねで、お殿さま、咲くかと思つて上見た目さ入つてしまつ
たど。

「いや、これはニセ者だ早くしばれ」

て言わつではあ、そのじさま、しばらくでしまった。んだから、なんぼ人はえ
え・ごんでも、人の真似するもんでないど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

29 こぶとり

むかしあつたけど。

右の頬つぺたにこぶのあるじいさんと、左の頬つぺたにこぶのあるじいさんと、二人いでやっただ。

右の頬つぺたにこぶのあるじいさんが、山に木伐りに行って、一生懸命で伐つてるうちに、雨降って来たど。そしてこんど木の洞穴に入って雨宿りしているうちに、夕方なんだから、眠ってしまったど。そしてヒョツと目覚めたら、目の前があまりににぎやかだから、何だと思つて見たら、鬼共が集まつて、一生懸命で酒盛りはじめただ。そのうちには飲めや唄えや踊れの、鬼共の宴になったつて。もともと踊りの好きなじいさんなもんだから、ついふらふらと出てつて、踊りに加わつて踊つたつて。

「いや、これは上手なおじいさんだ。あした明日の晩あしたげも来いよ」
て、そう言わだつて。

「いや、明日、とても来らんね」

「来い、来るか来ないか、はつきり返事しろ」
て言うども、じさま、

「やれ、分らね」

て、こう言うたど。そんでも来るようにと、

「大事なものを、置いて行げ。お前の大事なものは何だ」

「こぶだ。何よりも大事なものだ」

て、こう言うた。

「そんでは、それ置いて行げ」

て、ぼつんと取らつてしまつたど。そしてはあ、じさま嬉しくて、嬉しく家さ
歸つたど。そしてばさまに、

「ばさ、ばさ、山さ行つて、昨夜泊ゆんべなつたども、こういうあんばいで、洞穴に寝て
たば、鬼共踊つて、そさはままつて踊つたば、また明日の晩げ来いよつて、こぶと
らつて来た。ほんでええ男おになつて来た」

て教えだつて。そうすつど、隣のばさま来ていて、

「そんでは、おらえのじんつあもやつて、とつてもらわね」

こう言うて、隣のじさまも行つたど。そしてはあ、その洞穴さ入つて待ちてだど。そしたら鬼共また集まつて歌い出したど。そして踊りも始まつたど。だが、そのおじいさん、あまり上手でなかつたど。

「いや、これは、にせ者だから、お前の頬つぺたさは、このこぶ喰付けてやる」
て、ペタンと、ない方さ喰付けらつて、二つ下げて泣き泣き帰つてあつたど。
自分でできないような人の真似するもんでないど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

30 猿 地 蔵

むかしあつたけど。

じんつあとばんつあといて、じんつあ、山さ火野うないに行つたど。ばんつあ、
「くたびつだ（疲れた）とき、じんつあ食えよ」

て、ノリモチ（米の粉で作つた菓子）はたいて、じんつあに持たせてやつたず
もの。そして一生懸命でうなつたから、

「御飯食つて、寄越して呉つだノリモチでも食つて、昼休みでもすつか」

なんて、それ食つて、口のあたりさ粉つけて昼休みしつたど。そしたら藪から
猿たちがガサガサと出てきて、

「オイオイ、ここさ地蔵さま眠つだから、持つて行つて、おらえの宝物にすつぜえ、
おらだ」

そうして、じさま、てんぐるまのせて、つれて行つたど。そして行つたら、
大井川さ行つたど。そしたら猿たち、尻、クランとむぐつて、漕ぎ出したつて。

そのうちにおじいさん、何か下げたど。そしたら、

「下ったはなんだ」

て、一匹の猿は言うだど。次の猿は、

「延命小袋こんぶくろに打出の小槌」

て言う。そのうちにおじいさん、屁ブウとたっだど。

「鳴ったは、なんだ」

「時の太鼓」

て、おかしく性ないども、我慢してたど。そして自分の家さ着いではあ、猿だち床の間さ、おじいさんば飾って、お金を持ってきたり、御馳走をもつて来たりして上げ申して呉れたど。いっぱい溜ったところで、じさまそれ背負ぶってはあ、猿のいない後に家さ逃げて来たど。そして、

「ばさ、ばさ、今日は面白いことあった。ノリモチもらって行つたな食つて眠ねつだば、地藏さまと間違えて、猿だち、おればかつねで（かついで）行つて、こらほど御馳走や宝物上げて呉くったからなあ、それ持つて逃げて来た」

て、ばさまに見せて二人で楽しんでたど。そうしたば、隣のばさま来て、
「お前たち、こらほどの錢だの何か宝物、なじよにしてもうけやった」
て聞いてたて。

「おらえのじんつあは、これこれであつたど」

て、ばさま教えたど。ほしたら、

「おらえのじさ、寝てばかりいっから、やらんね」

て、家さ帰って、

「隣のじさなど、これほどまず何かもつて来たから、お前も早くそこさ行つて眠
てろ」

て、ばさま、ノリモチ、早く一生懸命ではたいて、持たせてやったけど。そし
て、じさまは畑うなわないで眠てたど。

やっぱり、猿だち出てきて、

「いやいや、オイオイ、こないだ（この間）逃げた地藏さま、また此処にいたか
ら、持つて行くぜ」

て、てんぐるま^まのせて出^でだしたど。そして大井川さ行くど、また尻むくつて、

「ホイホイ」て、

「猿のふぐり濡れても、地藏のふぐり濡らすな、ホイホイ」

て漕ぎ出したど

「下がったは何だ」

「延命小袋に打出の小槌」

そのうちにまた出たど。

「鳴ったはなんだ」

「時の太鼓」

じさま、とても堪^いえ切れないで、フフフと笑ったど。そうすつど、

「これは贖^いもんだ」

て、一番深いどこさ、ゴホンと投げらつてしまつたど。んだからずるいこと
でなく、人の真似したりしないで暮すもんだけど。

むかしとーびん。

31 鼻たれ地蔵

むかしあつたけど。

あるところに、じさまとはさまがいて、じさま山さ行つて、あんまり喉乾いたので、陰の方さ降りで行つて水探したど。んだども、水、沢に流れていねから、どこらにあるかと思つて探しているうちに、地蔵さま見つけたど。その地蔵さまから鼻水、タチン・タチンと垂つでいたど。

「それでもええから、飲んでみたい」

て思つて、弁当食べた空に溜めて飲んだど。とつてもうまい砂糖水のような鼻水だったど。

「ええ地蔵さま見つけた。家さもつて行つて飲むべ」

て、そう思つて、地蔵さま背負つて来たど。そして床の間さおいて、

「ばさまに見つけらんねようにしなね、あまり垂んねから」

て、そう思つて床の間さ置いて、そして、弁当その下さ置いて、たまつた頃はそつと行つて飲んでくる。唇なめなめ出てくるもんだから、ばさま、おかしいと思つたど。そしてじさまが仕事に出た後に、上段に行つてみたら、地蔵さまの鼻から、水、タチン・タチンと垂つてだど。

「これ、じさま、なめんなであつたかな」

て、そう思つて自分も飲んでみたど。大変にうまがつたど。

「いや、こんなうまいもの、タチン・タチンでなく、い・ま・と・一・杯・出・し・て・飲・ま・ん・な・ね」

て、そう思つて、焼け火箸つくつたど。そしてこんど、地蔵さまの鼻の穴さ焼け火箸、ジーンと刺してやつたば、キャッツと高窓破つて逃げて行つてやつたど。

そしたば、じさま仕事から帰つて来て、また水飲むべと、

「実は、おれ、なんだかおかしいと思つて行つて、飲んでみたば、あんまりうま

いし、いっぱい垂るように、焼け火箸、鼻の穴さ突つ通したら、逃げて行った」
て、そう言うたど。そう言うたら、

「このばば、とんでもないばばだ。お前の鼻さも刺して呉れっか」
て、そう言わつて、じさま怒ってやつたど。

んだから、お互に隠しっこなどしないで暮らすもんだど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

32 姥 捨

むかしあ、六十一才になつど、親を山さ置いて来たもんだど。息子が親を捨て
に行ったわけだど。そうすつど、ふさ背負っていた親が、木の枝をポキンポキンと折
る。

「こんな真似して、帰ってくる気なんだか」

て思つて行つたつて。

ある山さ行つたら、降ろしたずうんだな。

「お前帰るとき、道に迷わねように、木の枝折つてきたから、迷わねで帰れよ」
そう言わつて、とても親ば捨てらんねと、背負つて帰つたど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

33 夫婦と鏡

むかしあつたけど。

ある殿さまが「触れ」廻して、

「灰で縄なつたものには、何でも好きな御褒美くれる」

て、そういうお触れ廻したど。そしたら、その息子が工夫して縄なって、一把に束ねたままで、火点けて焼いて、ソクツとそのまま持つて行つたど。殿さまの前さ。そしたら殿さま、

「よく出来た」
て。

「では、お前の好きなもの、何でも呉れるから、言ってみろ」
て、こう言わつたど。

「おれあ、何も欲しくないども、死んだ父親に会いたい」
て、こう言わつたど。そしたら、殿さま、

「ええどこでない。会わせてくれっから」

その当時、殿さまでもないば、鏡なていうもの持たねがつたど。そしてその鏡を呉れたど。そして箱に入つた丸い、こう持つ鏡であつたど。そして、

「もう二・三年経つてからでないば、蓋取んなよ」

て、こう言うて教えたと。そしてそれを固く守つてはあ、三年過ぎてから、そ

の箱の蓋とつてみたど。そしたば、自分の顔は鏡に写ったど。そしたら父親によく似た顔であつたと見えて、父親だすもの。

「ああ、ええかつた、親に会えた。殿さまのおかげで…。こりや大事にしまつておいて、ときどき会わんなね」

て、また蓋してはあ、大事にしまつておいたど。そしたら、かが、こんど、

「おらえの親父、どうも座敷の方さ行つて、ニコツと来ると。何まず仕舞つておいたもんだ」

て、不思議に思つたど。そしてこんど親父のいないうちに探したど。あつちこつち。そしたら、その丸いもの見つかつたずも。それから蓋とつてみたど。したらば、何ぼかええ女なんいたずもの。

「親父、おれに隠して、こんなええ女なんしまつていた」

こんどは怒つてしまつてはあ、そればかりが、ブンブばていたど。

親父、帰つて来たど。

「この親父、今まで人ば騙して、あんなええ女なんかくして、毎日会つていだなであつ

たな」

て、大喧嘩になったと。

「そんな女かくして置くはずあつか
て、

「いや、ある」

て、二人でゆずり合わねずもの。

「ほんだら歩い^あで見ろ」

て、そのかがは親父ば引張って行つたど。座敷さ。そして箱とつて、

「ほら見ろ、こんなええ女しまつて置いて……」
て、こういうたど。親父あ、

「それなど、おらえのおどつつかだ」

て、こう言うど。そして顔と顔よせてみたば、二人写ってしまったど。それで
はじめて、これは写るもの、子は親に似るもんだなど、二人で悟つて、仲よく暮
してあつたど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

34 和尚と小僧

(1) 歌くらべ

むかし、加賀の法輪寺というお寺あった。その小僧さんに太郎と次郎と三郎というのいて、太郎というのは武士の子で、次郎は百姓の子、三郎は和尚の子であつた。

ある日、おりんという女がボタモチ売りに来た。

「お前だ、〃りん〃という字のついた歌詠めば、ボタモチ買ってやる」
て言うた。そしたば、武士の子は、

りんりんと、小反りにそつた小雉刀

一ふり振れば、敵はちりりん

て詠んだ。

「ほう、上手出た。なに餅ええ？」

「あずき餅、ええ」

て買つてもらつた。

「今度、お前の番だ」

て。百姓の子に言つた。

りんりんと、小反りに反つた春鰯

なめして食うたら、腹がとちりん

て詠んだ。

「おお、よく出来た。お前は何ええ？」

「きなこ餅ええ」

て。

こんどは最後の和尚さんの子の番になった。

りんりんと、リンゴの花を手に持ちて

詣るお寺は加賀の法輪寺

て、こう詠んだ。

「上手だ。お前は何ええ？」

「ごま餅ええ」

て、買ってもらって食った。むかしとーびん。

(川崎みさを)

(2) かい餅

むかしあったげど。

お寺の和尚さんと小僧がいてあったど。和尚さんが、かい餅練り^ねして食うども、

和尚さん、自分でばっかり食^くつて、小僧に食^たべさせない。あるとき、和尚さんが、御法事に招ばつて行つた後に、小僧が一人で作つて食べたど。あまり作り過ぎして、食べ残したど。それで、入口の雪の中さ鍋のまま埋めたど。そして忘れつど思つて、ギンギンと踏んで、その上さ糞たつておいた。

次の朝に見ると、雪降つて見えなくなつてしまつた。小僧は道踏みに出て、

雪降りて、しるしの糞も見えざれば、

かい餅鍋は、いずくなるらん

て掘つていた。それを和尚さん聞きつけて、

「小僧、いま何て言うた」

「雪降りて、しるしの松も見えざれば、わが故里はいずくなるらん」

て言つた。

「よく出きた。そんでは、かい餅のことは許す」

て、和尚さん言うた。

(川崎みさを)

(3) 小僧ごろし

大石沢の寺で、和尚さま、小僧一人もって暮しただけ。そしてこんど、甕さ砂糖買ってしまっておいだけ。毎日舐めていっども、小僧にめつたに舐めらせねずも。

「何とかして、一ぺん舐めでみっだいもんだ。和尚さま、ちよつともらつて舐めてみたいな」

て言うだけ。そしたば、

「いやいや、これは小僧ごろしというて、和尚になんねうちは、舐めらんねもんだ」

て教えらつたというもの。それから仕方ないから、小僧は黙って大人しくしつたけど。そしてこんど、

「今日は、まず、おれ隣村さ用事あつて行つて来んなねから、気付けて、火危なくないようにして、留守番してろよ」

て、そう言わつて、和尚さま行つたけど。今日こそ舐めて呉れましょう、和尚さまいないうちと思つて、戸棚の戸開けてみたば、上さいっぱい砂糖入つていたずも。これ舐めてしまつて、

「来たら叱られんだか、どうしたらええんだか」

て、工面して、本尊さまのどさ持つて行つて、本尊さまは観音さまだ、観音さまの口さ砂糖べつたり塗つたど。それから毎日上げておくお仏器割つて、和尚さま、大抵帰つて来る頃だと思つて、泣いっただずも。

「小僧、いま来た」

て言うども、仲々戸開けない。そして「なんだ小僧」て言うたば、泣く音すつし、何して泣いっだ、腹でも病めやつかと思つて和尚さま入つて行つてみつど、
「おれは、今日、和尚さまいないうちに、お仏器割つたから、申訳ないから、死んでしまふべと思つて、小僧ごろし舐めたども、まだ死なね」

て、そう言うて泣いっただずも。そして行つてみたば、

「いや、おればり舐めだでないども、なんだって空になつてだ。観音さまも食つ

「ただ」

て、観音さまば池さ投げだれば、クタクタ、クタクタと孔あいっだどこから音すつずも。

「そんじゃば、この観音め、舐めて小僧にかんずけたか」

て、上げて叩くと、カーン・カーンというずす、また池さ投げれば、クタクタクタクタと言うずも。そしたれば、和尚さまは、

「おれあ悪かった。本当は、おれ、あんまり砂糖好きで、いじわるして、お前に舐めらせないで、悪かったんだから、決してお前悪いのでないから、おれもこれから回心して、うまいものあれば、分けて食せ^かつし、悪かった」

て、和尚さまの負けだったど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

(4) まんじゅう

和尚さま、法事さ出て行つた後、常に呉れないまんじゅうを小僧が食つた。そして和尚さま来るまでに何としたらええかと考えていたども、考えつかねうちに、和尚さま帰つたども、

「本尊さまさ上げておいたおまんじゅう、なして聞かないで食べた」

「おれでない、本尊さま食べた」
て言うて、

「本尊さまは金仏だから…」

「ほだて、おれ食ねから本尊さまだ。ほだら食つたか食ねか叩いてみつか」
て叩いてみたば、カーンというど。

「ほう、食ねて言うど」

和尚さま、こう言うたど。

「ほんだら、火あぶりにしてみたらええでねえか」

て言うたど、火にあぶったども、音立てね。

「ほんでは、和尚さま、水さ入っで見たらええでねえか」

水さ入っでみたば、金仏やいたもんだから、クツタクツタというたど。和尚さまは小僧に負けやっただ。

(川崎みさを)

(5) 梨と小僧

むかしあつただ。

お寺の和尚さま、小僧三人も持っただけども、そのうちでも、唄詠みの上手なないて、そのとき和尚さま、大きな梨買つて、しまつていたども、毎日なじよにするもんだか、おらに一つくらい食せてもええべとて、一つも食せないずもな。

ある日、あまり食せねから、謎かけたずも。

梨一つ、おしみ坊主の抜首は

切りたくもあり、切りたくもなし

そう詠まつで、和尚さま仕方なく、カブト脱いで、梨ありだけ出して、小僧に御馳走したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

(6) プウプウとズズズとエーカンナ

むかしあつたど。

ここのような山の中にお寺あつて、三人の小僧と和尚さまいたけど。そうしてこんど、一人の小僧は餅大好きで、餅好きだから、プウプウと名付けっただじし、それからいま一人の名は、甘酒好きだから、ズズズと名付けたじし、それからいま一人の名は酒好きだから、エーカンナと名付けたど。

そしてこんど、たまには飲ませっずも、まず和尚さま一人で飲んだり食ったりすることあるだとも、今のような寒いような晩げだざあ、

「今夜はあんまり寒いから、みんなの好きな御馳走すつから、おれ、餅あぶつたら餅好きな呼ぶし、呼ぶまでんでに自分の好きなことを、自分の部屋行つてしろ」

て、和尚さま言うたど。そう言うて騙して、騙したばかりではあ、自分、餅食たいものだから、一ワタシ焙ぶつて呼ばんねで、熱くなつたから上げつど、プウプウて言うてしまったずもな。プウプウて吹いで。「ハイ」て言うけざあ、小僧起きてきて、自分ばり食ふることなくてはあ、一ワタシみんな小僧の御馳走にしたけど。

それから、餅は小僧に聞きつけらつて、皆食つてしまつたし、こんど、

「甘酒でも爛して飲むかなあ」

て、甘酒お爛して、そしてこんどあまり熱いなたか何だか、「ズスズス」て言うたずも。そうすつど、また「ハイ」て起きて来たな、甘酒好きな「ズスズス」

て言う小僧であつたど。その次に、

「さあ、よく爛して、酒でも飲んで、いっぱい元気で、寝る他ない。酒お爛しましょう」

て、お爛して飲んでいたけあ、「ああ、ええ爛だ」ってそう言うて飲んだずも。そうすつど、それを聞きつけて、「ハイ」てまた起きてきたずも。そうしてはあ、そのええ爛したの、酒はみな小僧の御馳走にしてしまつて、和尚さまはその晩げ飲みも食いも出ね。小僧の御馳走になつたけど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

(7) 落ちるのは拾え

むかしあつたけど。

大石沢に、お寺の和尚さま、小僧一人持つただけど。下叶水あたりの葬式あつて、

「葬式だから、うちのところの和尚さまばりでなく、大石沢の和尚さまも頼みた
いから」

て言わつて、頼まつで出かけて行つたど。そうして塞の神の橋どこまで行つたば、橋の下、溺になつてゐるもんだから、ハヤ（魚）いっぱい泳いんだずもの。

「雑魚いた、雑魚いた。和尚さま、ちいと採りたいな」

「何語つてゐる。葬式さ行くとき、見るもの聞くもの、黙つて来い」

なんて叱つたずも。そしてこんど、また行つたば、風吹いて来たば、和尚さまの笠とんだど。んだども、黙つて拾つて、うしろさ隠したずも。そしたらこんど、ちいと行つてから、

「おれ頭に冠るものないな、こりや、飛んだの、なして教えね」

「見るもの、聞くもの、黙つてろと言わつたから、拾うは拾つたども教えねで、隠した」

て、こういう風にして隠したど。そしたら和尚さま、

「落ちるもの何でも拾え」

て言うたど。それからまだ行つたれば、いまちいとで下叶水の橋さ行きそうにしたら、こんど馬のつて行つたげんど、和尚さま、馬糞たれ始めたずも、ボタバタ、ボタバタと。こんど笠突出して、こう拾つたど。

「落ちるもの、何でも拾え」

て言わつて、笠拾つたども、落ちるもの何でも拾えて言わつたからだど。

「この馬の糞、どうしたらええべ」

て、和尚さまの前さ出したど。そうしてこんど、

「そんなことするもんでない、拾うたつて拾つてええものと、悪れものある。そんなもの投げろ」

て言わっだもんだから、こんどはあ、仕方なしに笠も洗って済なしたべも。
あんまり常々叱ちつていたからだど。そして和尚さまの負けだど。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

35 化狸と和尚

むかしあつたけど。

むかし、ここのお寺で、来る和尚さまも来る和尚さまも、みんな何か化物に食くつで、居ねぐなってしまうごんだど。あるとき偉い旅僧そなが来て、

「そんでは、おれはこの寺さ具そなわつてみる」

で、こう言うたど。村の年寄りに。そしたら、

「いやいや、どんな和尚さま来ても、みんな食かつでしまつて、駄目ななだから、

お前もそんなことしない方がええ」

て、こう言うたど。

「ほだども、いやいや、おれば直らせて呉くろ」

て、そしてその寺さ入ったど。そして夜になつたど。一生懸命で火焚いて、こんな石をあぶつておいたど。そしたらこんど、「今晚わ」て来たど。旅僧がな。

「和尚さま、和尚さま、一晚げ泊めて呉んねえか」

「ああ、ええどこでない。同業者だもの、どうか泊れ、入ってだか何も蒲団もな
いから、おれも来たばりで腹あぶりして、二人で夜明かすぜ」

て言うたど。そうして泊ったど。まず夕飯の分、過して二人で腹焙あぶりしたど。

そうしてその泊めてもらった和尚さま、ねむかけはじめたど。そうすつど、利口な旅僧は火箸さ手掛けて、眠むかけすつど、こう頭下げつど、泊めてもらった和尚さま、こうカエツポひろげて出したど。こう頭下げつど、グググッと包くるんでしまふど。そうしてこんど、

「ああ、やつぱり、おれ思う通りだな」

て、こう思つて和尚さま、こんど深く眠つたようにして頭下げたど。そうすつどこうひろげて和尚さまかぶせそうにしたど。そんで、来た和尚さま見えねえほどひろげてしまつたど。そんどき火箸で焼いっだ石、ひよいとその中さ入つたど。そうすつどギヤツというもんで、戸開けて逃げて行つてしまつたど。そして次の朝げになつたば、村の衆、

「和尚さま、和尚さま、いたが」
て来たど。

「いた、いた」

「何にもなかつたが」
て言うて来たど。

「本当の和尚さまだか、化物でないか」
て言うずもの。

「いやいや、本当の和尚さまだから。来たけ、昨夜、化物、実はこれこれで逃げ
行ったから、裏のあたりに孔あ^{ゆんべ}んべから、そさ[・]みんなで行つてみんべ」

て。

「まず、村にありったけ、南蛮（唐辛子）集めて来い」

て、そういうたど。そして村の人は南蛮干しつたの、ありだけ持つて来たど。そして裏の沢の方さ行つて探してみたば、孔あつたど、その、この入口さ火焚いて、その南蛮をいぶしたど。そしてこっちから一生懸命でその孔さ扇子込んだど。そしたば「ウンウン」て音してあつたなだど。これあ切ないもんだから、こんどカエツポさは焼け石入れられる。南蛮いぶしはされるしして、切なくて切なくて這い出はつて来たど。そこをみんなで叩き殺してあつたど。それからそのお寺さ、何にも化物はあ、現われなくて、その和尚さまはえらい和尚さまで過してあつたけど。むかしとーびん。

（川崎みさを）

36 屁たれ嫁コ

むかしあつたけど。

ある家で、お嫁さんもらつたど。そしてもらいがけは丈夫で一生懸命で稼ぐ嫁さんであつたど。そして、日経つにしたがつて、何だか顔青ぶくれになつて、こわそう（疲れたよう）になつてきたずも。

「そがえに、顔面つらわるくなつて、どこさ切ないことないか」
て聞いたど。そしたば、

「どこも別に病氣ないども、唯一つ我慢したことある」
て言わつたもな。

「何、そがえに我慢した」
て言うたば、

「本当はそれみたいな屁たれだ」
て言うたど。

「ええから、そんがえな屁は誰も出るもんだから、堪こらえていないで、たれろ」
て言うたど。そしたば、

「ほんだら、みんな家内中、炉縁ふちさ喰くつついて呉くろ」

て、そう言うたずも。こんどみんな家内中、炉縁ふちさ喰く付くいていたば、いや、垂たつだ。大きな大きな、ブーと台風でもあつか、大屁たれつど、炉縁ふちさ喰く付くいた人もはあ、みんなよろめいて、半戸開けつだれば、外方とがたの梨の木は、みないっぱいしだれつだ梨、みな落ちてしまつたど。そうしたば、嫁の顔も段々にはれたのも、しびて来て、元の顔色になつて、そして治つて、丈夫になつて働いたけがら、あんまり屁は堪こらえているもんでないけど。とーびん。

(高橋しのぶ)

37 屁くらべ

むかし、丹後と備後に、屁たれるじさま、いであつたど。そしてあるとき、
「屁たれ較べしてみねえか」

て言うたど。殿さまの前で。そうしたら、たつたど。丹後のじさまは、

タンゴ タジマの

タンタコ タンタコ タン

て、たつたど。

「それは上手だ。上手だ、備後、お前だぞ」

ビンゴ ビジマの

ビツビコ ビツビコ ビツ

てたつたど。

殿さまは、どっちさも軍配上げようになかつたど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

38 播粉木の音と座敷を掃く音の嫌いなじさまと

小判のきらいなじさまの話

むかしあつたけど。

あんまり仲のええぐない、じさまたちいでやつたど。そして、

「お前、まず一番、何嫌いだ」

て、そう言うたど。そしたら、意地悪じさまは、

「おれは、朝げ播粉木で味噌する音と、座敷掃く音が大嫌いだ」

て、そう言うど、一人のじさまは、

「おれは、小判は大きらいだ」

て、そういうたど。そうしたら、意地悪い方は次の朝げ早く起きて行つて、朝げの座敷掃く音嫌いだという家さ行つた。座敷ザアザア、ザアザアと掃いて、そして播鉢さ味噌入つて、ガエロガエロとすつたど。そしたば、

「いや、恐つかない、恐つかない。嫌いだからはあ、止めて呉ろ、止めて呉ろ」

て、蒲団さもぐったど。じさ、ええ氣持で帰つて来たど。そうしたら掃がつた
 方のじさまは、別な方のじさまのどさ、自分の金あ、有りったげ持つて行つて、
 窓から、

「小判だ」

て、投げ込んだ。

「恐つかないから投げねで呉ろ」

て。有りだけ投げて行ってやったど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

39 長い名

むかしあつたけど。

男の子生まれて、何と名付けたらええべ、と相談したが、何を言うてもきんか（耳が遠い）なので、話が分らなかつたほでに、怒つて、

「そんだら、チョンキツチョ、チョンキツチョ、チョウヤニカイポ、チョンギノベツチョ、スツチョツチョ、タナツギマツジロウとでも名付けんだ」

て、そう名付けたど。

その子どもが遊んでいて、井戸さ落ちたというなだ。梯子かけて助けたいと思うど梯子なくて、ずうつと借りに行つて、

「おらえの子ども井戸さ落ちた。おら家のチョンキツチョ、チョンキツチョ、チョウヤニカイポ、チョンギノベツチョ、スツチョツチョ、タナツギマツジロウ、井戸さ落ちたから、梯子貸して呉ろ」

て行くじど、じじちやは、

「なんだて、なんだて？」

て、分んねど。そして手間かかって、梯子借りて来たところは、子どもは遂に死んでしまったど。

んだから、あんまり長い名、付けんなど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

40 古屋の漏り

むかしあつたけど。

じんつあとばんちや、いであつたど。貧乏な家で屋根もろくに葺かんねがつたど。そしてある夜、二人で炉端で当たっていたど。んだども、ええ馬コ生まれてあつたど。(二才馬のことをトネツコという)。そして飼って大事に育てつたど。それ、

こんど馬喰は、

「あそこのトネツコ、行つて売れて言うども売んねがら、盗んで呉れんべ」
て、こう思つて、待ち構えていたど。そしてこんど狼は、

「あれ、何とかして、このじんつあとばんちや、食つて呉^くつだいもんだ」

て、そう思つて軒場さ来ていたど。そしたら、じんつあとばんちやと話には、
「なんて、世の中に恐つかないと言うたて、古屋の漏ると、米櫃の空^{から}ほど恐つかないものないな」

て、二人はこう言うたど。

「はて、狼も恐つかなくない、古屋の漏るなんていうもの、米櫃の空なんていうものは、どんな恐つかないもんだべ」

て思つて、そう思つていたど。

「こんな恐つかないところには居らんね」

て思つて飛び出したど。そうすつど馬喰、トネツコ飛び出したと思つて、狼さ
縄かけて、結^ゆつないでしまったど。とうとう狼は馬喰にとらつてしまったど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

41 南の山の馬鹿聲

(1)

南の山の息子が里から花嫁もらつたというもな。そしてお盆のときに、嫁の実家さ行くことになって、聲さ親が教えたど。

「あの嫁の実家では立派な仏壇買ったから、盆札に行ったら、賞めらんね。んだども、見付けないで買ったどころあ、節穴のあんな買ったてな。んだから、”立派な仏壇買った”とほめて、”おいしいことには、ここに節穴あんな見付けないで買って来た”と言うべから、”十三仏買って、此処さ掛けた方がええべ”と言え」

て、嫁の家さ行つて、そう言えて教えらつて行つたそうだ。そしてこのお仏拝んで、それば賞めて、なんぼか嫁の家の人喜ばしたど。そうすつど、

「南の山のアンツア、おら家で馬もやつとこの間買つたから、見て呉ろ」
て、馬見たど。そしてずうつと見て来て、終いに尻の穴見つけて、

「いやいや、これあええ馬だな。ここさ十三仏掛けるとええ」と言うたど。
むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

(2)

嫁の家さ行つて、団子御馳走になつたど。よつぽどうまいどて、その名前決して忘れねべどて、団子・団子と帰る途中口置かねで来て、濠をまたぐとき、ひよつとまたいで、

「ヤツコラサ」

て、またいだので、こんどは「ヤンコラ・ヤンコラ」と来たど。そして、

「ヤンコラ拵えて呉ろ、ヤンコラ拵えて呉ろ」

て言うども、

「ヤンコラと言わつても分んね、どんなもんだ」

て言うたれば、

「ヤンコラよ、うまいヤンコラよ」

て言うた。そのうちに鍋かける鍵、手さ持つて手放して、バインと向うにやると、花嫁の額さコブ出きたど。

「ああ、痛いごと、ほに。何とも言わねで、ヤンコロ拵えて、と言わつても分んね。団子のようなコブ出きた」

「ああ、それよそれよ。その団子拵えて呉ろ」
て言うたどな。

（高橋次男）

嫁の家さ行つて、何て挨拶したらええか分んねので、親が川向うで豆蒔してたなに、聞いたそうだ。

「嫁の家さ行ったら、何て挨拶したらええ。」
そしたら、口上教えらったずも。川へだたっているもんだから、聞えなかったど。

「なえだて？」
て聞き返したど。

「これほど、言うても、まだ分んねか」
て、フクベンさ豆入れて蒔いたのを、そのフクベン振つて言うたど。そうすつど、家さ帰つて、フクベンさ豆入つて持つて行つて、

「これほど、言うても、まだ分んねか」
て、嫁の家で挨拶したど。こげな馬鹿さ、とても娘呉れらんね、と嫁取上げらつ

だど。

(川崎みさを)

42 狐と狸とかわうそ

むかしあつたけど。

むかし、小国さ村の衆買いものに行くことになったど。おらえのおつかちやに隣のおつかちやに、そのまた隣のおつかちやに買いものに行つたど。正月の。そしてこんどいっぱい塩魚だの塩だの、砂糖だの、いっぱい買って来んなねもんだから、年寄衆、みな買って来たど。子どもたちが迎えに行つたど。

「おかちゃん、ひどかったべや、こんどおらだ代つて背負うから降ろせ」

て、その荷物てんでに背負つて呉^くつたど。そしてこんど、

「おかちゃだ、くたびつたべから、ゆっくり来い。おらだ行つてつから…」

て、そう言うて、その子どもたち、さっさと消えてしまったと。そして家さ来てみて、

「みちこ、どこさ置いだ」

「何や、おかちゃ、おれそんなこと、荷物なて知しやねぜ」

て、こ言うたど。

「なんだや、あそこまで迎えに来たでないか、橋のところまで」

「迎えなて行かねぜ」

「隣のかずえも来たし、裏の千恵子も来たでないか」

て、こ言うたど。

「んでは、狐に騙さつではあ、せつかく買つて来たもの、みな取らつたんであつたなあ」

て、人たちはそういう風に話したど。そしてその取つた狐だちは山さ行つて、分けっこしたど。そうすつどこんど、狐は悪かしこいもんだから、分けかけたの親方になつたど。そして、

「かわうそ、かわうそ、お前は年中魚食つてるども、塩氣ないど、うまくないべから、お前は塩の方ええでないか」

て、そういうて塩呉つたど。狸は、

「お前はめつたに、おれのような足も早くないもんだから、穴の中に余計いるべから、お前はローソクにしたらええでないか」

て、ローソク呉つたど。そしてあと、自分がええものはあ、皆とつてしまったど。そうして、かわうそは喜んで、もらった塩、魚につけて食うべと思つて川にもぐつたど。そしたらみんな溶けてしまつて、はあ魚見つけるまでになくなつてしまつたど。こんど狸は穴さ行つて、

「今夜こそ明るくして寝んべ」

て思つて火点けたど。そしたら自分の毛さまで点いて、火傷してしまつたど。やけど

狐ばかりええことしたど。それほど狐ざあ、悪がしこいもんだど。

（川崎みさを）

43 八十尋

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいだども、子ども持たねがつたど。そして何とかして子ども欲しいと思つて、鎮守さまさ日参したど。

「どうか、ええ息子さずけて呉ろ」

て。そしてばんちや産んでしまつたども、肝心なもの喰付いていねがつたど。

「じさま、こりや困つたごんだ。これ無いでは、仕様ししよない」

て思つて、また鎮守さまお詣りに行つて、

「大抵、八寸ぐらいにええがんべ」

て、こう思つたども、間違つて、

「八十尋あるように、八十尋あるように」

て拝おがんだど。そうしたばぐんぐん伸びて、長くて長くて仕様ないほど長くなつてしまつたど。んだども、仕方ないもんだから、直して呉ろてなんて頼まんねし

と思つて育てたど。そして大きくなつたども、そんなものさ嫁の来とうもない。

「仕方ないから、お前、世の中広いから、歩つてみる、もしや嫁もあつかもしねえから」

て出したど。そしてその辺で藁で編んだな「カッコダワラ」て、種籾など入れるの、そのカッコダワラさ、八十尋つめ込んで肩さかつねて出かけたど。そうして、ずっと旅して行くども、なかなかそんな嫁はないくて、大阪の方まで行つたど。そして行つて、ええお天氣の日に、松の木の下さ昼休みしつたど。そしてカッコダワラを脇さ置いて昼休みしつた。そのうちに温かくポカポカちゆうもんだから、カッコダワラからヒヨロヒヨロと出はつて来て、そうして松の木ヒヨロヒヨロと登つて行つたど。そして天狗さまの鼻見付けつど、似たようなもんだと思つて、プクツと突ついだど。天狗さま魂消てしまつて、

「おれより長い鼻いるもんだ」

て思つて、その拍子に打出の小槌落して逃げて行つたど。天狗さまは、そうすつど下さ落ちて来たなて、目覚めだつて。そうしてこんど見たば、見慣れぬ小槌あ

るし、

「これは昔から聞いてる打出の小槌だに、相違ない」

て、そう思つて、

「よしよし、一つ試してみんべ」

「この、おれの長いもの、短くなつかなんだか」

て、そして、丁度ええくらいの寸法言つたど。そうしたら丁度よくなつたど。

「いや、これはええがつた、これだとお嫁さんもあんべ、んだども、まずおれは何も知しやねもんだから、勉強しなね」

て、そう思つて、大阪の鴻池という家さ行つて、番頭に働かせてもらつたど。

そうしてこんど、一生懸命かげひなたなく働くもんだからはあ、主人の氣に入らつて、そしてその娘の躰になつてもらいたいと、こう言わつて、大阪の鴻池といえば、音に聞えた旦那衆であつたつて。そしてその躰になつて、こんど、

「実はこういう親、国元にいたから」

て、話して、呼びよせて親孝行してあつたど。

むかしとーびん。

（川崎みさを）

44 猫とネズミとつばめ

むかし、お釈迦さまのどこさ、巾着きんちやくさ入れた薬、天から投げてよこしたもんだ。そうすつど、それが木の枝さ引つ掛つたもんだ。そうすつど、ネズミあ木の枝さのぼつて取つてくれるどこ、猫あ取つたもんだ。そんでお釈迦さまの涅槃さ、猫あのだまんねがつたど。

それから、つばめはあまり化粧しているうちにはあ、お釈迦さまは死んでしまつて、そんではまんねどな。

んだから、つばめは喉の下赤いし、背中はきれいだとかな。

（高橋きみの）

45 狐むかし

むかしあつたけど。

大石沢の方にも中津川の方にも、馬喰していて、むかし馬市開くと行つて買つたり売つたりする、馬喰いてやつたんだど。大石沢の馬喰が山に茸とりに行つて休んでだば、狐が二匹集^{あつ}ばつて、

「明日、おれ、馬市あるから、おれは大石沢の馬喰に化ける。お前は馬に化ける、そして馬に化けて、こいつ、おれあ高く売つて来て、ひともうけすつから、そうしないか」

て、狐が相談したど。そしたら大石沢の馬喰、

「これはええこと聞いた」

そして、何時頃落ち合うということ聞いたもんだから、次の朝げ、大石沢の馬喰狐行かないうちに行つたつて。そして、

「おいおい、早く行くぞ」

て呼ばったつて。

「ほう、うまく化けたな。おい、そのままだな」

て、その馬の狐が言うたつて。そしてヒゴザ着て、笠かぶつて小国のセリさ行つて、その馬は一番高く小国の金持の伊勢屋という家さ売らつたど。そしてその馬喰はその金持つて、ホクホクと家さ帰つて来たど。そしたら、狐は既さつながつてしまったもんだから、逃げ出すに大時間とつて、そしてまず杭破つて縁の下を掘つて、ほして、逃げて大石沢の馬喰になる狐のどこさ行つたど。

「この、なんだ、おれ、大難儀した。まず儲けた金、分けつだい」
て、こう言うたつて。

「何語つてるや、おれ、行つたときはお前いねがつたでないか」
そう言わつたど。

「いや、そんな筈はない。お前、あんがえ上手に化けて来たのに、そんな筈ない」
て、二匹で大喧嘩したど。

「ほだども、ここの馬喰に、おらだは騙さつてしまったのだから、ほんでは今度は

返報がえしして呉んなね」

て、二匹で相談したつて。そしてむかしは馬を利用して、ブナ畑さ朝草刈りに行くのだど。そんなとき、そのここの馬喰がやつぱり馬喰が、やつぱり馬喰して、夜ぶらぶらと通りかかったど。この道な…。そしてこんど、なんぼかええ女に行き会ったもんだど。

「こんな夜歩かねで、そこさおらえの家あつから、寄つて泊れ」

て、こう言わつたど。そして一杯機嫌であつたもんだから泊つたわけだど。そして、

「まず、湯さでも入つて疲れ直すどええ」

て、そう言わつて、湯さ入つて、ええ気分であつたど。そして、若衆、朝早く馬引つぱつてはあ、唄うたいながら、ブナ畑さ草刈りに行つたど。そうしたらその馬喰、裸になつて、そのブナ畑に、夫婦沼つて、沼二つあんな、その一つの沼さ入つて、ガフリ、ガフリと流していたど。

「なんだ馬喰、そんな朝つぱらから沼さ入つて…」

て言うた。

「何語つてゐる。こんなええ湯ない」
て入っていたど。

「そんなとこは沼だぞ」

て教えらつて、氣イついて、そしたば沼さ入^{はい}つてあつたど。狐の返報がえしさつ
だんであつたど。そんな悪いことはするもんでないど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

46 火 車

むかし、あるところに貧乏なお寺があつたけど。そこに年寄の和尚さんがいて、
虎猫を小さいときから育ててかわいがっていたけど。

ある晩、和尚さんが寢床^{とこ}に入り、うとうとして夢を見たつけど。虎猫が話かけるように、

「和尚さん、和尚さん、ながい間かわいがつてもらったが、おれも永くは生きられそうもないから、御恩返しに、明日^{あした}の茶毘^{だみ}に、村一番の旦那さまの娘が死に、あちこちのよいお寺さまが頼まれて来なさるが、うちの和尚さん、頼まんないから、お棺に、立派なお寺の前でお経を上げて、その時におれがお棺を空に吊り上げるから、そしたらみんな驚き、もっともつと和尚さん方をたのみ、お経を上げると思うが、うちの和尚さんが頼まれるまで、決して降ろさないから、頼まで行ったら、「ナムカラタンノウ、トラヤーヤ」と何べんも何べんも拝むように、と言うのだったど。

和尚さんが、ふと目をさましてみたら、虎猫がきちんと枕元に坐つていだつけど。和尚さんは、こんなこと、猫が言うとは思わねえが、と半信半疑で寝て起きたど。そしてその日、いよいよ茶毘^{だみ}になったけど。そして、お棺が立派なお寺の前に据えられて、お経が始まったけど。そのうちに、一天にわかにかき曇り、黒

雲が舞い下り、みんな恐ろしくなり、目をふさいだど。そのうちに、お棺がずんずんに登って行つたけど。身内みうちの人も皆びつくりして、早く早く、和尚さん方、ありがたいお経を詠んでおくやいと頼んだど。和尚さん方も一生懸命拝むが駄目だつたど。そこである人がもしもあの貧乏寺の和尚さんが、ありがたいお経でも知つてつか、頼んでみたら、と言うど、

「駄目だべや」

て言う人もあつたが、頼んで来たど。そこで和尚さんは、昨夜ゆんべなの夢は、猫が語つたなであつたなと気がつき、

「ナムカラタンノウ、トラヤーヤ、ナムカラタンノウ、トラヤーヤ」

て何回も何回も大声で上げたど。そしたらお棺がズンズンと降りて、元におさまり、無事に茶毘もすみ、和尚さんがいっぱいお布施もらつて帰つて来たら、虎猫はぐつたりと炉端に寝てだつけど。和尚さんが、

「トラ、トラ、お前のおかげで、こんなに沢山お布施もらつて来たさい」

て言うたど。虎猫は、ああ、これでおれも御恩返しできてうれいと言うたど。

そして、

「もし、いまちい・と和尚さんがおそかったら、お棺落すところだった。ほら、こんなに爪が痛んだんだもの」

て、血だらけの手を見せ、ああ、よかったよかったと言うど、そのままコロツと死んだけど。和尚さん、泣き泣きねんごろに葬ったけど。それから、あちこちから茶毘があれば、和尚さん、和尚さんと頼まれ、一生安泰に暮したけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

47 天狗とボタモチ

博奕したどこさ、天狗来て、
「おれどこを、一つはめで呉ろ」

て言うて、天狗もそれさはまって博奕して、里人を負かした。負けた里の人は逃げてきて、

「何が一番嫌^やんだ？」

て、天狗に聞かれっど。

「おれは、何嫌^やんだって、ボタモチぐらい嫌^やんだものない」

て、そう言うて、天狗さ、

「お前の嫌いなものは、何^{なえ}だ」

て聞いたら、

「おれは何嫌いたって、バラの木ほど嫌いな木、ない」

て言うもんだから、里の人は家の廻りさ、バラの木切つて来て、立てたじだ。

そうすつど、天狗はボタモチ持つて来たども、バラ植えてあつて入らんね。ただ高い窓開けて置いだて。そうすつど天狗はあんまり近くさ寄らんねもんだから外にいて、家の中さ、ボタモチを雨あられと投げ込んだごんだど。

「いやいや、熱い、いたい。切ない、切ない」

て、家の中で、その里の人は音立てて、そのボタモチ拾って食ったど。
むかしとーびん。

(高橋きみの)

48 猿と蛙びつきの寄合田

むかしあつたけど。

蛙びつきと猿いでやつたど。そして猿は、

「蛙あ、おれと二人で寄合田作んねが」

て、こう言うたど。したば、「ええ」て一人で作って、畔塗りに行つたど。畔は
塗つたども、次、田うなう段になつたど。そして蛙は、

「猿殿、猿殿、今日は田うないに行くぜ」
て寄つたど。

「いや、今日はとても頭いたくて行かんね」

て、こう言う。仕方ないから、蛙は一人で行って、その田うなつて来たずも。そしてその次の代掻きして田植になつたど。

「猿殿、猿殿、今日は田植だから、行くぜ」

て呼んだら、

「今日はとても腹やめて行かんね」

て、こう言うど。

「ほんでは仕方ないから、おれ一人で植えて来んぜ」

て、そう言うて、蛙は植えてきたど。そしてこんど、田の草取りになつたど。

「猿殿、猿殿、田の草とりに行くぜ」

「いやいや、今日は疝氣病^やめて、とっても行かんね」

「いや、ほんでは仕方ない。疝氣では冷^ひえっから大事に寝てろ」

て、今日は田の草も一人で取つたど。そして秋になつたど。

「猿殿、猿殿、稲刈りに行くぜ」

て呼んだど。

「いやいや、今日は何だか、とても気持ちわるくて行かんね」
て言うど、

「ほんでは、おれ刈つて来っから」

て、そして蛙は稲も自分で刈つて来たど。そして、

「それを粉にして餅搗いて食うべ」

て、こう言うたど。そしたば、

「今日はおれもはまる。今日は元氣だ」

て、二人してそれを粉にして餅搗いたど。そしたら、猿言うことには、

「ただ蛙、この餅食つては面白くないから、裏の金比羅山まで背負い上げて、この臼、まくつて（転がして）みないか。そして下で、早く来たものは、拾って食うことにしねえか」

て、そう言うたど。蛙も仕方ないんだから、「オイ」て登ったど。

「よし、おれ背負つて行くから」

て、背負い上げだど。そして金比羅山からゴロンゴロンと、まぐつたど。猿は早く下まで来て、待ち構えつたど。その餅拾うべと思つて。そしたば、蛙は後からピタンピタンと来たば、臼に餅喰付いでだら、ええがつたべに、喰付かないで、途中の柴やなんかさ、みな餅喰付いではあ、途中にあつたど。それ蛙が拾い集めてはあ、いっぱい持つて来たど。そして来てみたば、臼が下まで来て、ストーンかぶさつて、蓋さつてあつたずも。そして、

「早く、蛙、開けて呉ろ、早く蛙開けて呉ろ」

て言うずも。そんではあ、脇さ餅置いではあ、臼まくして、猿ば出して呉つたど。そしたば、猿はさつぱり餅も食^かんで、臼の中さ入つていだであ。蛙はこんど餅千切つて食う。猿はけ^なり（うらやましい）くてはあ、

「そっちの方食うんだ、そら下がるぞ」

なて言うずも。そしてしまいに、

「おれにも、ちいと呉んねえか」

て、こう言うずも、

「ほだども、先に拾った者食うことにしたなだもの」

て、こう言うずも。

「そんなことやねで、おれにもちいと、呉れちや」

て、こう言うたど。そうすつど、蛙は今までのことあつて、あまり面白くないもんだから、中の方の熱いところ取つて、頬つぺたさピタンとぶつつけで呉つたど。

「ああ、あちちち…」

猿、むしり取つて食べたど。

「いま、ちいと呉ろちや」

こんどまた、熱いところ、中から別な頬つぺたさピタンとぶつつけたど。

「ああ、あちち…」

むしりとつて食べて、猿あ、それから顔赤くなったのであつたど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

49 かわうそと狐

狐は利口だし、かわうそは狐から見ると、馬鹿なもんだから、かまわずそのかわうそば欺して雑魚とらせて、

「こんどの次は、おれが山にいて、山諸掘るの上手だから、お前来るときまで、山諸掘って御馳走すつから、まずこの度、お前雑魚たくさんとって食せてける」
と言うて、そして行つては食つたど。そしてかわうそは狐さ行くと、天向いて呼ばてもつねつても音立てないというた。そして狐はその後かわうそどこさ行つて、

「いやいや、おれだ狐の契約で、何日は天^{いつか}まむり、何日は地^{いつか}まむりを仰せ付けられて、この間は、天^{てん}まむりで、天^{てん}コ吹いていたとき、喋るも動くもできなくなっていた」

そういうこと語って、かわうそば欺して食べものを食い食ひした。

「こんど来たとき、掘っておくから」

て、行つてみると、こんどは地まむり仰せつけらつてだ。そういうこととして、そっくりかわうそば欺ましつつたてな、かわうそはあんまり欺さつたあげく、なんぼ心よしでも、思いついて、

「お前、そんな長い尻尾持つてで、おれみたいに水さくぐらなければ、雑魚とらんねのでない、お前だれば、感ずる（寒く感じる）朝方に小便たれで、そうすつど、氷さ孔開くから、そこさ尻尾を入れるだけ突込んでおけば、夜あける頃になれば、とつても食い切れない、持ち切れないほど雑魚喰たがつつかから、それ、その上げるのだ」

て、かわうそは狐さ教えたど。そうすつど、その通りにしたど。狩人が朝げ早く家の前さ出はつて、高みで眺めだば、狐あいた。

「狐いた。早く鉄砲持つて行つてとれ」

て、鉄砲かつねて大走りに来るのを、狐あ見たので、狐は切ながつて、

「小雑魚も大雑魚も、みな離れろ」

て、なんぼ動いても抜けなくて、鉄砲打たれたど。んだから、そういう意地わ

るいことするもんでない。むかしとーびん。

(高橋きみの)

50 オットンタカ鳥

オットンタカ鳥は一日に八千八声さやずらねなんねどな。

二人兄弟あつたどな。弟が悪いどこばり食つて、兄貴にええどこ食せたなな、
そいつが、

「おれにさえ、これほどええどこ食せるもの、弟はなんぼええどこ食ったか」
て、弟の喉押えてみたら、ア・ン・ク・ミばかり食つてだどな。

その罰で、一日に八千八声さやずらねなんねど。自分の食べるものも探して探らんねどな。そんで、この辺の山さ行くど、モズかけとかて、柴折って蛇だの蛙だのて、刺さつてるもんだ。これがモズあ、オットンタカ鳥さ採って食せるつ

もりで木さ刺しておくのだ。

(高橋きみの)

51 テデッポッポ

テデッポッポは天氣のええくて啼くのは、「石堂さ蛇いる」て啼くなで、雨降つて啼くときには、「川端さ埋めたカカア流れる」と啼くとか。

(高橋きみの)

52 かちかち山

むかしあつたけど。

じんつあとばんさの二人暮しあったけど。そしてじんつあ、

「今日はあんまりええ空だから、おれ、山さ行つて来つから、ばんさ留守番してろよ」

そしてはあ、山さ豆まきに行つて、お昼飯もつて行つて食べてはあ、昼休みしつたずもな。そしてこんど、昼休みして起きて、

「ああ、こんど涼しくなったから、一生懸命に蒔いて行くべと思つてはあ、昼の前うなつて昼間から蒔き方して、

「一粒の豆は千粒になれ、一粒の豆は千粒になれ」

て、一生懸命で蒔いっだずも。そうすつどこんど狸出はつてきて、

「一粒の豆は一粒でけつがれ、一粒の豆は一粒でけつがれ」

て言う。それでも知しやねふりして、

「一粒の豆は千粒になれ、一粒の豆は千粒になれ」

てはあ、蒔いて、その日はまず蒔き終つて来たど。そして次の日は、

「ばさばさ、まず狸め、こんなこというて、あんまり憎いけから、今日は獲る工

面して行んから、隣の村さ行つて、モッチ（鳥モチ）のある家あるから、いっぱいもらつて来い」

て、おばあさんにモッチもらわせて、こんど大きな石あつたもんだから、そ・さ・い・っぱいモッチ塗つていたずも。そしてこんど、じさま、また豆蒔きはだ・た・だ・。

「一粒の豆は千粒になれ、一粒の豆は千粒になれ」

て蒔いたれば、また出はつて来たけざあ、こんどその石さ腰掛けて、

「一粒の豆は一粒でけつがれ、一粒の豆は一粒でけつかれ」

て言うずも。そんでも知しやねふりして、

「一粒の豆は千粒になれ、一粒の豆は千粒になれ」

て蒔いて、そしてこんど、よっぽど時間経つたから、狸の畜生、動けなくなつても知んねと思つて、そしてこんど、「この畜生、何語る」て言うど、逃げる氣になつたども、こんど腰さひついで逃げらんねずも。それから、鍬でびったり叩いてはあ、足結^ゆつけて家さ持つて来たど。

「ばさ、ばさ、今日は狸、仇とつてきた。そさ足結^ゆつけで下げて、そしておれま

た、いまちいと蒔き残したの終して、早く上がって来っから、決して狸なんて、悪くすつど、死んだ真似して、生きつことあつから、気付けて、何と言わつたて放すなよ」

て、よく教えて、また豆蒔きに行つたど。そうしたば、ばんさ留守居して上げ手拭にして、むかしだから手搗きして、米食うな、トチントチンと米搗きしつたど。臼さ、またがつてそうしたば、

「ばさ、ばさ、米搗きこわいべ（疲れるだろう）、おれば一刻いっときこほどいでみろ、おれ搗いて手伝うから」

て言うずも、

「いやいや、おれ一人で搗かれつし、じんつあに決して放すなて言わつたから、そんな、おれさんね」

「一刻いっときだから、またじんつあ来ねうちに、おればつないで元のように下げておけ」
て、そうしてばんさ、とうとう騙さつで、ほどいたど。そうすつどこんど、ばさ、米搗いっだどこ杵を持って叩いて殺してしまつたど。そうしてはあ、こんど

ばさの着物きて、ばさの手拭かぶつてはあ、狸、

「じんつあ、あまり遅いようだから、くたびつで来るべから、おれ、先に拵えておくべ」

て思つて、ばあさんば殺して煮て、ばあさんになつて、また米搗きしていたどこさ、じさ、歸つて来たど。

「ばさ、ばさ、今歸つてきた」
て。

「じんつあ今日、くたびつで来つべと思つて、狸汁、おれ拵えて煮つだわ」
「おお、それはええがった」

そして二人で食つて、酒一杯買つて来つたのあつたもんだから、酒飲んでええ機嫌になつて踊つたずもの。そうすつどこんど、

「狸食うどて、ばば汁食つた」
むじな

て。こんど狸がばあさんに化げつたの、踊つこんだど。そして、

「この畜生、ばあさんに化けて、そんな真似して…」

ずうもんで、こんど本気になつてはあ、じさに叩がつて逃げて行つたど。
ばあさん殺さつたもんだから、じさ泣いっただずも。そうしたば兎来て、

「じんつあ、じんつあ、なして泣いっただずも。」

「おれ狸にばあさん殺さつて、こつたうわけで殺さつて、泣いっただずも。」
て言うたば、

「よしよし、おれ仇^{かたき}とつてやつから泣くな」
て、そう言うたけど。そうしてこんど、兎、

「おれ、仇とつてやつから、狸んどこさ行つて談判して、まず地蔵さまの屋根、
あんまり損^そじたから、地蔵さまの屋根葺きに連^つつて行つて仇とりすつから…」
て、兎、狸んどこさ行つたずも。

「地蔵堂の屋根、あまり損^そじつたから、屋根葺きに行んから、お前も手使つて呉^くろ
て、そしてこんど、

「お前、萱背負え、体格ええから」

て、萱背負わせて、杉葉もあんの、自分、後から背負つて、

「お前先になれ、おれ、お前より身成なりちっちゃいから、後になつて行んから」
て、そして何だかプウプウ、プウプウという音する。

「なんだ、異な音して来たな」

て、狸。

「あれ、向い山のプウプウ鳥だ」

そのうちに、背中はどうどん、どんどんと燃えて来つずも。

「いや、熱つつい、熱つつい、早く早く」

て言うども、萱一背負い背負つていたもんだから、背中みな焼けてしまったど。

そうしてはあ、苦しんで竹藪さ行つて寝つたど。そさ、こんど兎行つて、薬売りの姿になつて行つて、

「なして苦しんでいた」

て言うたば

「こういうわけで、火傷して苦しんでいた。ええ薬あつどし知しやねが」

て言うたば、

「だら、おらもたんと（多く）持たねなだども、これ残つていたから、火傷さ、うんと効く薬だから、これ点けてみる」

て、唐辛子粉やつて、つけてみたど。いや痛くて痛くて、泣いで、また別なところに行つて治す工夫ないかと思つて行つたば、竹藪あつたけあ、竹藪にも兎いたけど。そして、櫛けずりしつたけど。「何するんだ」て言うたば、

「火傷しつたでないか、その火傷さだら、櫛刺して、高いところから落ちつど、火傷したとこの毒水こぼれて、じきに治るもんだ」

て、そう言うて、

「竹櫛、ほんではおれに一本呉つてくれ、こんど治つど、まず結いなしすつから（^ゆ結い）手使けするそのお返し」

て、竹櫛もらつて行つて転んだ。いや、痛い痛い。前にもまさつて痛くなつたど。そうして、こんど泣き泣き、なんとかして治したいもんだと思つて行つたら、また杉林あつてぎあ、そこでカチンカチンと何か削る音すつから行つてみたら、

そこにも兎いたど。

「何だ、兎、おれば騙して、まずこがえにおれ、背中痛くて治して呉ろ、こんなことでは、おれ死んでしまう」

「いやいや、それは竹林の兎、おれは杉林の兎だ。違う兎だ」
「^{こしや}拵えっだのは何だ」

て言うたば、

「おれ、舟拵えしたのだ。おれ、この舟さのつて、雑魚とりすんべと思つて、舟拵えしつたのだ」

て言うたば、

「おれにも一つ拵えて呉れ」

て、そしてこんど、

「あんまりええから」

て、自分の舟は杉で作つて、狸どさやんのは土で造つて、二つ作つたずも。見かけは似たような色着けで…。そさ行つたけど。そして、

「舟できたから、今日は雑魚釣りに行くべ」

て、そして行つたずも。そしてこんど、兎先になつて、杉舟さ櫂棒もつて、狸は後になつて、土舟さ櫂棒拵えてもらつて、兎は杉舟ツエーてのつど、どこまでも行くずも。狸も「おれの舟もツエー」て言うども、なかなか行かねずも。そして段々に遅れて行く。兎はずんずんのつて、「杉舟、ツエー」て行くども、狸のはズブズブ、ズブズブと段々沈んでしまつたずも。そして首ばり出して、

「助けて呉ろ、助けて呉ろ」

て言うども、

「おれは、この前、ばさまば殺した仇とつてくれると、じさと約束したから、今仇とつてやんのだから、思い知れ」

て、そこで沈めらつてしまつたけど。

むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

大阪にも京都にも、蛙いでだど。そして大阪の蛙は、

「何とかして、おれも京都、一ぺん見たいもんだ」

て思つて出かけて行つたど。

ピタンピタンと出かけて、峠まで行つたど。

「いや、疲れた疲れた。腰痛やめつから、一つ立つて……」

て思つて、立つたど。蛙の目は天頂てんちやうにあるもんだから、立つたもんで、後ろ見

えたど。そうしたら、大抵京都見えるかと思つたのに、立つた拍手に、後ろ見え

たもんだから、大阪見えたど。

「なんだ、京都なんて大阪と、同じおんなや、こんなこんでは、見ねえてええ」

その蛙はまたピタンピタンで、大阪さ帰つてしまつたど。

京都の蛙もそれと同じに山の上まで行つて、

「いやいや、こわいこわい（疲れた）、ここからでもええから、見つかない」

て、また立ったど。そうすつど、京都見えてしまつたど。
「いや、大阪も京都と同じや、おんなこんでは見ねえ方ええ。」
て、またそこから京都の蛙も戻つてしまつてあつたど。
むかしとーびん。

(川崎みさを)

54 節分の話

むかしあつたけど。

むかし、丹波の大江山さ鬼住んで、毎日毎日、今日はこっちの娘さらわつた。
昨日はあつちの娘さらわつた。毎日毎日、若い娘衆ばさらつて行くけど。それ聞
いて、源氏の大將、頼光さまは渡辺綱という人に言いつけて、
「本当に住むか住まないか、大江山の方さ行つて確かめて来い」

て言うたけど。そしたば渡辺綱は馬さのつて行つて、羅生門という門の前さ行つて、

「丹波の大江山さ鬼住むということ聞いて来た。本当に住むか住まぬか」

て、大音立てて叫んだど。そうしたばこんど、黒い雲さのつて鬼、どんな姿になつて出て来たか、ヨロイ・カブトで行つたの、

「本当にいた」

て、下つて来て、カブトさこう食^くつ立てた。それがいまちい^いとで頭さ、いま一枚というところで頭さ傷つかないですんだけど。そしてこんどその手を抑えて挽^もいで来たど。そしたば、

「七日うちに取っ返す」

て、そう言うて逃げて行つたど。それからこんど、渡辺綱は家さ帰つて来てはあ、みんなに言いつけて、

「この腕とつて来たども、七日うちに取っ返すて逃げて行つたから、何時なんどき来ないもんでないから、人に化けて来つかも知んねし、誰来たつてこの大事な

箱さ入ってしまったておくから、見せんなよ」

て言いつけて、用足しに出るにも、決して出さねようにしったけど。そしたばある晩げ、「こんばんわ」て入って来て、

「今晚わ、忘^わせたかもしんないども、久しぶりで来てみた。渡辺やい、渡辺やい」て呼^よばったずもの。そして戸を開けてみたば、白髪ばりのばあさん、杖棒ついで入って来たずも。そしてこんど、

「まず、おれば当てて呉^くろ、今夜寒いから」
て、火さ当^あって、さまざま話^わしてゐるうちに、

「おれは、お前小さいとき、育てた乳母だ」
て。

「今はこんな形になつたども、若いときは、お前ばめんごくてめんごくて、乳母になつて来て、寒いときは絹や小袖さくるんで、膝脱いで小便も大便もみな膝さ引^ひっかけ、暑いときは扇の風で涼ませて育てた奴だ」

て、そういう話して、なんぼか鬼の腕^{うで}とって来たという話聞いて、それ見たい

ばかりに難儀して来たなだから、おれに見せて呉くろ」

て言うずもの。

「そんなものとっても、とられるもんでない、おら・よ・う・な・者・の・力・で、そんなこと嘘だから、当って、おらえさ泊つてもええし、戻るでもええし、そんなこと嘘だから他人ひとの話だから、おらような者の力で取られるものでないから……」

て言うたども、

「あれ、これほど言うても見せらんねと言うことあつか。まず、おれにおがしてもらつたこと思い出したら、見せらんね筈ない」

て泣くずもの。そう言わつてみれば、見せねわけにいかねから出して見せたど。

「なんとなんと、恐ろしいもんだ。おらはあ、どう喰付いっだもんだべ。まずこ
う喰付いっだもんだべか、こう喰付いっだもんだべか」

て、持たつて見っただけあ、

「これこそ、おれあ腕だ」

て言うけあ、破風から逃げて行つたど。そしてこんど、逃げて行かつでしまつ

たし、

「さあ、これは困ったことした」

て思つたども、まずは失策でかしてしまつたから、また頼光さまと相談したわけだべ、そうしている内に、またあっちこっちの姫もさらわれ、こっちの姫もさらわつたから、

「どうでも首とってもらねば仕様ないから、どうでも大勢で行つて、退治してこい」

て、またこんど親方から命令受けて、一に頼光、二に渡辺、三に貞光、四に宝生、五に金時、六季武と六人で行つたど。そしてこんど、みな、葛籠つづらさ入つて、道具もつて行つて、姿を山伏の姿になつて行つたずも。

そうして大江山さ来てみたば、酒呑童子親方になつて、みな恐おつかながつてふるえている姫たちばおさえてはあ、舞えや歌えの大さわぎだつたずも。そうしてこんど、いよいよのときは、これ吞ませて退治するて、かねてから約束して行つたもんだから、二つ口あるのさ酒つめて行つて、こっちさ右さ曲げれば、自分た

ちの飲む酒ええな出る。左き曲げれば毒酒出るように用意して行つたど。そして
こんどそのとき、みな酔えたとき、いよいよ毒の酒出して、左の方から汲いで毒
酒吞ませて、自分たちは右の方の飲みして、みなはあ、酔えて親方つぶつてしまつ
たど。それ目がけて、こんどみんなでこの時だと言うもんで、ヨロイ・カブトで
身を固めてはあ、頼光はじめ鬼の首とつたど。とつて、それはまず箱さおさめた
べし、子どもは恐つかねがって、どつから逃げたらええんだかと大さわぎしてい
んな、

「みんな、おらいうこと聞けば、おらいうこと聞いて、素直にすれば、決して
殺さねで助けっし、どうする。煎つたホシコは海さ入つて泳いだら、里さ出てき
てもええし、それから煎つた豆、畑さ行つて生えたら、それも出て来ててもええか
ら。煎つた豆生えねべし、乾したホシコがそのままであつたら、決して里さは
出て来んな」

て、その約束で、こんど帰つて来たけど。それから節分をするのは、その謂で、
豆木さホシコはさんで、ここではしやがして、豆煎つて、そして節分のとき豆撒

きすつどき、

天福・地福

福は内、鬼は外

鬼の目ン玉ぶつつぶせ

てされるもんだから、こんど鬼もなくなつて、みんな安泰に暮されることになつたけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

55 酒 呑 童 子

— 越後瞽女の伝えたもの —

酒呑童子は今こそ鬼、むかしの変化へんげの世にあるときは、イタコシカ村の権助の

総領、親にならの養子に呉れて、吉田長野でわが師匠等に、稚児にやりたや十六才、おとこ美男と浮名を立てて、世間世情の女郎姫たちに、遊び来いとこいぶみの恋文もらう、文の来ることマンド（万石）の如く、笠の続くことメドリ葉は（一枚一枚）の如く、和尚ふみきびしよふみで見ることならぬ、今日は日もよい天気もよいし、和尚の留守の間に文干ふみししようと、カワゴ・ツヅラの蓋とれば、人間の思ひといは恐ろしもので、顔へかかりて、ガエンとなりて、角は生えたし、金齒は生えて、ところ鎮守に、ここにいるなど追い立てられて、ここにいられず弥彦が山に、弥彦大明神に追い立てられて、ここにいられず大江の山に、丹波大江山は鬼の住む山で、鬼を集めて家来と名付つけて、世間世情の女郎姫たちをさろうて来、血をしぼりて酒と名付け、肉を刻んで肴と名付け、これを天下に聞えたならば、一に頼光、二に渡辺の綱、三に貞光、四に宝生、五に金時、六季武、あれら六人、おおえない手あい、腰にホラの貝、手に数珠さげて、知らぬ山道、ちどりたどり登りくる、ヤレ。

（川崎みさを）

56 鬼神のお松

むかしあつたけど。

笠松峠つて、けわし峠あつたけど。そうしてそこに鬼神お松て名付けらった泥棒いたけど。そして通る人、通る人も、みんなそれに殺さつてはあ、そこさ行つた人で帰つた人はめつたになかつたど。

そしてある日、夏目弾正白三郎という人通りかかつて来たば、川端さ倒れたきれいな女子いらずもの。そして、

「ああ、腹痛^やめる、腹痛^やめる」

て苦しんでゐるもんだから、

「そがえに腹痛めるでは、こんなとこにいらんねがら、医者でも行くとか、向うの宿場さ渡る他ないから、おれに背負^ぶされ」

て、そして背負^ぶつて大井川を背負つて、真中ごろまで来つどはあ、その脇差抜いではあ、白三郎ば殺してしまつたずも。そして自分はまた元のように逃げて、

その名前は、

一里のぼれば不動が滝 二里のぼれば十二が屋形

三里のぼれば人も通らぬ岩屋の屏風

という、けわしいどこさ逃げて行つたど。家では一週間もよつても帰つて来ないなて心配しつたけど。そしてこんど、いるうちに権助と三助と二人で雑魚釣りに行つたずも。そしてずつと川歩きで行つて、釣りしてゐるうちに、何だか薄黒いもの、大きな石さ引つ掛つていたと思つて見たば、なんだか白三郎という人死んだという話聞いた。それでもないんだか、とにかくお上さ届けてみねえかて、その死体はお上さ届けてみたば、やつぱりその死骸であつたそうだ。そうしてこんど、それを拾い上げて息子は夏目仙太郎という人であつたけど。それ、こんどまた仇討ちたいまんまに、けわしいどこさ行つて、岩のぼつて、一里のぼれば不動が滝、二里のぼれば十二が屋形、三里のぼつて行つて、人も通らぬ岩屋の屏風それ通り抜けてまた行つてみたば、やつぱり川端にきれいな女、どこわるいんだか、苦しんで寝つたそうだ。

「どこわるい」

て言うたば、

「今日、何にもはあ、足は病める、腹は病める、この川渡りたいと思うども、とても渡らんね」

て、また、

「それは嘘だ、にせものだ。名を名のつてやる。この前、おれの父の夏目弾正白三郎ていうのば打ったの、貴様にちがないから、尋常に勝負しろ」

て、そういうたど。そしてこんど、鬼神お松も短刀もつて一生懸命たたかったども、とても仙太郎には敵わない、めでたく仇とつて家さ帰ったど。

むかしとーびん。

(川崎みさを)

57 おりや峠

むかしあつたけど。

むかし、越後にお里乃という娘がいて、その家で、蛇漬けて、そして「三年経たねば食うな」て、カメさ味噌漬にして置いっだつて。こんど少しずつ食べさせろ。あまりうまいもんで、家の人のいない後に、その味噌漬少しずつ食べ食べて、カメ一つ全部食べてしまつた。こんど喉乾いて、かわいて、とても汲んで飲んだんでは足んなくて、入り水の桶にかぶづいて、そして水飲んで、それでも足りなくて、手前の川さ行つて、川さ入つて水飲んだ。そしているうちに大蛇になつてしまつた。そして川にいらんねために、大里の山に入り込んだんだ。そしてその山を七回り半巻いたとき、一人の坊さんがその山道とおろしかつた。そして夜になつても、盲目なもんだから、越すべと思つたども、とても途中まで行つたら疲れて来たし、さびしさも来て、道側さ腰かけて三味線ひいて唄うたつた。そしてその蛇というのは唄がなんぼか好きなもんで、そし

てまず、坊さんのことだから、ええ女か悪い女か分らねども、まずええ女がでてきたそうだ。

「坊さま、坊さま、おれ唄が好きなんだから、いま一つその唄きかせてくろ」
て、その坊さまがまたその唄きかせたそうだ。そしたば、

「坊さんが誰にも言わないごんだら、おれも素状を言う」
て、

「おれは、実はこういうわけで大蛇になつてしまつて、この山七巻き半まいたども、十二巻きまけば、関八ヶ谷、水の海にしたいと思つてゐる。んだども、おれの体には一番わるいのは、鉄だ」

こう言うたど。

「だが、人に話せば、あなたはすぐ死んでしまうぞ」

て、そう言うたど。その坊さまは誰にも言わねごとにして下つたど。そして下関しもせきの関三左衛門さまという大地主さまさ泊めてもらつたど。

血相かえて、その坊さま、そして、

「村の衆を集めて呉ろ、おれ話し終れば死ぬべから、片付けてもらわんなねし、聞いてもらわんなね」

そして、こういう蛇が七巻き半まいてるそうだから、十二巻まけば、関八ヶ谷海にするからと言うから、どうか早く退治してくろ、て言うたつて。言い終つど坊さまは、すぐクンと死んでしまったど。そして、その坊さま祀るために、座頭の宮というお宮建てて、今でも杖も笠もあるそうだ。そして、

「蛇の体には鉄の錆は一番毒だ、そういうごんだ。それから栗の木の、栗の渋も毒だというごんだから、それらを持って行つて打ち込んだらええべ」

て、こう教えて死んだそうだ。そして村人たちがみんなで杭を作つて、山さ行つてみたば、一樽もあるようなの、巻いでであつたど。そして、てんでんに杭を打つたそうだ、その蛇さ。そしてその蛇が七日七晩苦しんだつて。そしてこんど尻尾落して、パチャンパチャンと言わせて、その地名が大内渕、そういう風に今でも地名あるど。そして関八ヶ谷助^{たす}かてあつたど。それで恩返しに、今でも祀られてるど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

58 果てなし話

むかしあつたけど。

向いの山から、大きな蛇、頭出したけど。今日もノロノロ、明日もノロノロ^{あした}、あさつてもノロノロ、やなさつてもノロノロ、毎日ノロノロ、ノロノロ。その蛇出はつて来たけど。

(川崎みさを)

ぼたんと落ちては、くりつとむけては、ころころと転び、いつまで語ったて…。それ。

(高橋きみの)

昭和四十一年現在

話者 高橋しのぶ (六五)

高橋きみの (七四) 昭和四十四年没

加藤たつ (七五) 昭和四十四年没

川崎みさを (五八)

あ　と　が　き

置賜の冬は豪雪に埋まってしまう。そしてその下に一軒一軒の家があり、そこには一つ一つの囲炉裡があり、そこにあかあかと火が燃えている。吹雪の冷たいきびしさ、丈余の積雪の重さと、家の中の温かさは平衡を保っているようにさえ思われる。昔話はそうした中で語り継がれて来た。小国では屋根から雪を降ろすのではなく、雪原の中に家を掘り出す「雪掘り」という言葉が今も使われる。

東京で御活躍の松谷みよ子氏、大川悦生氏、それに児童図書館館長さんの小河内芳子氏を、この雪の中を小国町大石沢に案内できたのは幸いであつた。勿論そのために同学の先輩奥村幸雄氏が逐一話者との交渉をして下さり、すぐれた話者である高橋しのぶさん、川崎みさをさんと再度めぐり合うことができたのはうれしい限りである。しかも高橋しのぶさんの御子息は御病氣入院加療中であるにもかかわらず、細かい温かい配慮が奥さんに托されて、御心配下さったこと、涙が出るほどであつた。更には県立図書館の川部敏男さん、そして小国町長さん、

総合開発センター所長さんに限りない感謝を申し上げたい。そして雪上車を運転して下さった運転手さん、叶水支所長さんにも感謝申し上げる次第です。

小国町の昔話には次のような特質が見られる。置賜ではアイヅチはないが、ここでは必ず「ハイ」と聞き手が言わないと話を続けないこと。それに越後文化との交流があり、特に越後瞽女が多数入ったこと、越後と米沢の通路であったから、商人の往来がはげしかったこと、語りおさが平野部とちがって「とーびんさんすけ、びつたり釜のふた、灰で磨けばええ銀玉、ハア、さんすけふんはい」「むかしとーびん、河鹿の屁、つつつき候」などは大変特色のあるものといえる。もちろん個々の昔話についてもその地域の特色をさぐることは可能であるが、全体としても以上の特色を見ることが出来る。私自身としては「藤六話」としての親孝行話は初めてであるし、「金の斧・銀の斧」「ネズミ浄土(2)」「鼻たれ地藏」「夫婦と鏡」「和尚と小僧」「化狸と和尚」「屁くらべ」「播粉木」「八十尋」「狐むかし」「大阪の蛙と京都の蛙」などもこの地方ではじめてのものである。さらに「酒吞

童子」の越後くどきは、ゴゼの「くどき」を聞くことができたことは収穫であった。

ともかく、いい話者にめぐり合ったときの感動を、松谷みよ子さん・大川悦生さん・小河内芳子さんと分かち合えたことを喜び、高橋しのぶ・川崎みさを両嬢に感謝申し上げます。ただ、昭和四十一年の調査の折に御協力下さった、すぐれた話者であった、高橋きみのさん、加藤たつさんは、すでに鬼籍に入られた。まだまだお聞きしなければと思っていたのに、非常に残念である。この場をお借りして、御二かたの冥福をお祈り申し上げる次第である。

今後二集・三集をもって、小国町内の昔話集成を続行完成させたいと考えており、諸氏の御教示、御批正を是非お願い申し上げます。

武 田 正

昭和四十五年二月十日

お杉お玉

小国昔話集

非売品

昭和45年2月15日 発行

編者 武田 正

(南陽市三間通二二二の三)

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お杉お玉

小国昔話集 一

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年六月三十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあつたけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七二年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』（一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』（一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』（一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『牛方と山姥（四） 海老名ちやう昔話 第四集』（一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『飯豊町昔話集 — 大平・新沼・高畑 —』（一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』（一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『お杉お玉 小国町昔話集（一）』（一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『さとりのお化け 小国町昔話集（二）』（一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『鬼と豆のくいぐら 小国町昔話集（三）』（一九七〇年十月、二〇〇八年六月再刊）

